■始めに

このセッションプレイレポートは２０２１年に開催した、「ダブルクロス The 3rd Edition ステージ集 ディスカラードレルム」掲載のアカデミアステージを舞台とするリレーキャンペーン第１話「Into the Storm」のプレイレポートになります。

ＧＭの都合で一部の誤字脱字や話の流れを修正してあります。併せてご了承ください。

尚、再配布などはご自由にどうぞ。

□目次

■始めに……1
□目次……1
◆トレーラー……2
◆パーソナリティーズ……3
◆ハンドアウト……5
◆オープニングフェイズ……7
▽シーン１：夕立……7
▽シーン２：懸念……17
▽シーン３：取材……20
▽シーン４：羅盤……24
◆ミドルフェイズ……28
▽シーン５：幸運……28
▽シーン６：出現……33
▼戦闘……39
▽シーン７：変異……43
▽シーン８：情報……47
▽シーン９：灯台……50
◆クライマックスフェイズ……56
▽シーン10：逆風……56
▽シーン11：颱風……62
▼ラストバトル……65
◆エンディングフェイズ……80
▽シーン12：龍夢……80
▽シーン13：仮面……84

◆トレーラー

オーヴァードアカデミア。
太平洋上に浮かぶこの島に、また夏がやってきた。

水飴のような暑気の中を泳ぎまわる、奇妙な噂。
幸運を呼ぶ通り雨、森の中の龍、大風水羅盤、そして〝遺跡〟。

少女の声に応えて現るは、空の蒼を駆け福を招ずる瑞獣か。
狂飆より現れ厄災を齎すケガレの化身か。

ようこそ、ここは学園都市。
禍福と吉凶とが絡みあう〝日常〟の夏空。

ダブロクロス The 3rd Edition
「Into the Storm」
ダブルクロス――それは裏切りを意味する言葉。

◆パーソナリティーズ

▼〝英雄賛歌（ヒーロー・ソング）〟桐島（きりしま） 啓一（けいいち）

UGN職員を親に持つAランク:サポーターの男子生徒。エフェクトの無断使用で度々注意を受けている「不良学生」であり、風紀委員会からも問題児扱いを受けている。

ソラリス/ウロボロスのクロスブリードで、能力のほぼ全てが他人の支援・守護に振り分けられているサポート型。Dロイス【優しい奇跡（カインドマジック）】の《ディヴィジョン》を用いたダメージ軽減能力は侵蝕率の増加こそ激しいものの、生半可な攻撃を通さない。

他人の怪我には敏感で、前述の無断使用も「怪我をしそうになっていた誰かがいた」ための行使であり、その優しさゆえに様々な人から好かれがち。

▼〝腐り落ち（フルハイドラジラムジャケット）た自叙伝〟桜庭（さくらば） 清羅（せいら）

風紀委員会に所属する高等部2年の女子生徒。FHの「マスター」の元で後継者として育つという過去を持つが、それを気取らせない程に明るく気丈な性格。

Dロイス【錬金術師（アルケミスト）】によって強化された《ハンドレットガンズ》を《マルチウェポン》で複数同時に操る高火力の単体アタッカー。

制服は着崩しがち、問題がない範囲でのエフェクトの無断使用もあまり気にしないが、本人いわく「ちょっとお目こぼしが多い」だけで職務に対しては忠実。特に日常を破壊しようとするものに対しては容赦なく風紀を発動する。

▼〝昨日は曇り、今日は晴れ（アイロニー・オブ・フェイト）〟雨宮（あめみや） 未羽（みう）

「この世のありとあらゆる〝難問(学問的な意味で)〟を越える難問を自分たちの手で作り出す」数理部に所属する女子高生。よく人を揶揄うが、基本的にはお人好しな善人。

Aランク:スペシャリストのピュアノイマン。鉄火場では卓越した戦闘指示による《常勝の天才》で味方の攻撃力を大幅に向上させ、撃ち漏らした敵を《雨粒の矢》で仕留める攻撃よりの支援役。

Dロイス【複製体（デュプリケイト）】由来の複雑な出自ゆえか、やや自分を卑下しがちな側面があり、周りより一歩引いた姿勢で物事を捉える時がある。

▼〝静粛に〟佐藤 菫（オーダー さとう すみれ）

元ディオゲネスクラブ所属、現在はCランクの女子生徒。
戦闘においては装甲無視の《絶対の恐怖》をメインに、必要に応じて《風の渡し手》で複数体に当てて盤面の制圧を行う交渉型アタッカー。
かつては〝遺産〟を研究するセルに所属し、自身も【遺産:白猿の額冠】と契約を交わすDロイス【遺産継承者（レガシー）】であったが、学園に遺産が隠されているとの情報から入学。クラブに所属するも、元々破壊活動には乗り気ではなかったところを、UGN側からの「遺産の調査許可と引き換えに、学園の治安維持に協力する」という取引によって離反、現在へ至る

▽〝歩き出す鉄騎〟七種 七楽（ベゼウエイン・メカネス ななくさ ならく）

享楽的かつ尊大な性格の男子生徒。一人称は「余」。
元FHチルドレン候補生で、その当時施された多脚戦車オルトロスへの〝組み込み〟手術の後遺症により両足が動かないため、<秘密兵器フォールンマシン>を《テクスチャーチェンジ》で変形させた歩行支援機に搭乗している。

▽祝（はふり） 鈴音（すずね）

オカルト研究部の副部長を務める、ピンク髪と巨大なだてメガネが特徴の高等部2年生。
東洋系のオカルトに強く傾倒しており、易占に独自の解釈を加えた「ハフリ式変転開運易占」という、恐ろしく胡散臭い占い方法を日々実践しては、当たりはずれを繰り返している。
幼い頃、ジャーム絡みの事件に巻き込まれた際、強く願ったことで「龍が現れ、怖い人をやっつけてくれた後に、能力を授けてくれた」ことで覚醒した。

▽ハコベ

島内ボランティア倶楽部の部長を名乗る高等部3年生。
常に「戦闘用着ぐるみ」を着込んでいる不審者。
秘密主義者でありランクは非公開、シンドロームも周囲には伝えていない。常に変声期前の少女のような声で会話することから、《七色の声》で肉声を擬製しているようだ。

◆ハンドアウト

▽ハンドアウトＡ／幸運の日
シナリオロイス：祝 鈴音　推奨：Ｐ 友情／Ｎ 厭気

このところキミはツイてない。
小銭を落とせば側溝に転がって取り出せなくなるし、
買おうと思ったモノは大抵売り切れている。
電車やバスの席は目の前で埋まるし、シャーペンの芯は折れるし、実に不幸だ。
そんなキミの不運をたちどころに解決する方法があるという！
それは！　あなたにとって100年に一度のスーパーラッキーパーソン！
オカルト研究部2年！　この祝 鈴音と行動を共にすることです！
……というわけで、キミは祝という女子生徒にヤケに気に入られている。
そしてこれが不思議なのだが――彼女が一緒にいると、妙に運が良い気がするんだ。

▽ハンドアウトＢ／風紀委員会より
シナリオロイス：ベアトリス・ハックマン　推奨：Ｐ 任意／Ｎ 任意

校舎裏に奇妙なモノが建築され始めている
……という報告が風紀委員会に齎されたのは7月の朝のことだった。
粗大ごみをぶちまけて組み上げたような「大風水羅盤」
作成の主犯は、高等部２年の祝という生徒らしい。
届け出は出ているため、決して校則違反ではないのだが、
どうにも不気味なこの奇天烈オブジェクト群を放っておくのは少々問題がある。
そこで風紀委員長のハックマンは、縁のあるキミに
羅盤をそれとなく見張るよう頼むことにしたのだという。
彼女が言うには、どうもあの羅盤からは
よくない雰囲気を感じるということなのだが……。

▽ハンドアウトＣ／残雨
シナリオロイス：プリシラ・カルハバル　推奨：Ｐ任意／Ｎ任意

近頃〝学園〟では「幸運を呼ぶ通り雨」という現象が話題になっている。
曰く、雲一つない快晴の空の下で突然の土砂降りに襲われた、
かと思うともう晴れている……そんな通り雨に遭遇した生徒は皆、
その後数日に渡って不思議なほどの幸運に恵まれるのだとか。
学園の情報通、プリシラはそんな雨を追って寮への突撃取材を敢行。
彼女と縁のあるキミもその手伝いを頼まれたのだが、
突然の雷雨が２人を濡れネズミにしてしまう。
噂通りすぐに空は晴れたが――キミはその雨から
微かなエフェクトの影響を感じ取る。

▽ハンドアウトＤ／龍の目撃者
シナリオロイス：龍　推奨：Ｐ任意／Ｎ任意

島内ボランティア倶楽部――口さがない生徒たちからは
「ボンクラ部」などと呼ばれることもある、
学園内でも有数のヘンなやつらが集まる部活。
生徒会には頼めない非合法な、あるいはあまりにもくだらない雑用を
放り投げられる連中の長、函辺からの頼みをキミは引き受けてしまった。
弱みを握られているのか、利用価値があるのか、単に仲がいいだけなのか。
ともあれ、部に寄せられた依頼「大風水羅盤の作成」を手伝うため、
材料採取へ出たキミが高等部校舎裏手の山で見たもの。
――それは１匹の、顔のない龍だった。

◆オープニングフェイズ

▽シーン1:夕立

7月中旬。
早いもので、君たちが高等部の2年になってから、もう3か月の時が過ぎた。
厄介な試験もほとんど終わり、蝉の声と共に来るはサマーシーズン。
孤島とはいえ万単位の人間を抱える〝学園島〟、夏のお楽しみはいくらでも見つけられる。
……のだが。

このところ、学園島では超局所的な雨が住民を困らせている。
雲一つない晴天の午後、教室移動のために歩いていた生徒たちの頭上が急激に暗くなったかと思うと、途端、バケツをひっくり返したような豪雨が襲い掛かり……十数秒もするとぴたりと止む。
落ち着いて状況を確かめようと空を見上げた時には、既に空はウソのような快晴で……という具合。

GM：……ちょうど、キミたちが学校から帰ろうとする、今この時のように。

桐島 啓一（桐島）：「最近多いな、こういう雨」
桜庭 清羅（桜庭）：「うわ、最悪じゃん。さっきまで雲とかなかったじゃん？桐島くん？」
桐島：「なかったよ清羅……はあ、やっと〝魔女〟に追われずにすむ時間になったってのに」
雨宮 未羽（雨宮）：「いやー困ったねえ。モルフェウスの人とか居なかったかい？ 傘に限らず何か作ってくれるとありがたいけれどもね」
桜庭：「ごめーん、銃しか作れない。」

佐藤 菫（佐藤）：「やーやー君たちも雨宿りかい？」
雨宮：「おや佐藤さん奇遇だね」
桜庭：「おっと救世主か？」
桐島：「よー菫。人数分傘持ってねえ？」
佐藤：「いやー生憎手ぶらでね」「どうもどうも」
桐島：「残念、仲間だ」
桜庭：「違ったかー」
佐藤：「緊急時ってなら無理やり気泡作って我慢して帰るんだけどねー流石にこの程度で目つけられたくもないし」（*1）

七種 七楽（七種）：「……これだけ頭数があって、誰一人傘もないとな」
七種：「こりゃずいぶんと不運だの」
桐島：「お前のその機械雨大丈夫なん？」
七種：「きちんと防水加工済みでな！ 海に潜ったってサビたりせんのだよ！」

七種：胸を張る。
桐島：「まじかよ。じゃー夏休み入ったら海底で宝さがしだな」
桜庭：「ヤバ、でも本体溺れそう。」
佐藤：「そこまで凝ってるなら仕込み傘でもつけておけばいいんじゃないのかい？」
七種：「うーむ……人型形態に変形させると風紀委員会に目を付けられるでな……」

佐藤：「んー…いつやむのかねぇこの雨。天気予報とかどうだったかな…」ウェザーニュースでも見よう
桜庭：「まごうことなく晴れだったよ。朝複数サイト見たもん。」
佐藤：「だよねぇ…ここまで大外れすることある？ 雲もかかってなかったんだけど」
桐島：「天候弄るエフェクトとかあったっけ？」
七種：「ぱっとは思いつかんな……あれ、試験範囲だったっけ？」
雨宮：「天候いじるエフェクト…いちおうあった気もするが、かなり力のある者でないと使えなくなかったかな」

雨宮：「もうめんどうだし雨突っ切って帰ろうかなあ」
雨宮：「髪のダメージは代謝制御でなんとかなるし」（*2）
桐島：「鞄濡れっぞ？俺は手ぶらだけど」
雨宮：「鞄よりもっと濡れてほしいところとかあったりしないのかい？」
桐島：「俺セクハラしない男なんだ」
雨宮：「草食系すぎても出会いがないよ？」
桐島：「一理ある」
雨宮：「まあ肉を食べたくなったらいつでも好感度を教えてあげるから」
桐島：「じゃー未羽の好感度教えてくれ」
雨宮：「私は攻略対象外でーす」
桐島：「しょっぺえ～」

桜庭：「ねぇ佐藤さん、あの会話淫らじゃない？」桐島と雨宮を指す
桜庭：「風紀したほうがいいかな？」
佐藤：「私は何も聞かなかったから、そういうことで」
桐島：「俺と清羅の中じゃん、見逃して？」
桜庭：「え～、何か目の前で他人口説かれてんのやだ～。」

ＧＭ：「……ふーむ、お二人は何やら怪しげなご関係の様子」
ＧＭ：「これは一つ占ってみるほかありませんね！　そう！」

ＧＭ：奇妙に明るい声が、君たちの背後から飛んでくる。
ＧＭ：振り返れば、やけにデカい伊達メガネをかけた女子が、にやりと笑いながら

祝　鈴音（祝）：「さあさ、どんな方法にします？　占星術？　八卦？」

雨宮：「では清羅が啓一を口説けば…おや？」

桜庭：「あー、祝さんかー。びっくりした。」

佐藤：「またオカルトの話かい祝さんや」

祝：「ふふ……オカ研の副部長として、恋と進路には首を挟まざるを得ないのでございます！」

桐島：「進路はやめとけ」

桜庭：「人の恋路を邪魔する奴は…」

雨宮：「おや鈴音、じゃあひとつ清羅と啓一の相性を頼みたい」

<BCDice：桐島　啓一>：DoubleCross：(CHOICE)　→　八卦

桐島：「じゃ、八卦で」

祝：「ほほほ、相性占い了解いたしました！　それではッ！」

祝：懐から算木を取り出すと、ぶつぶつと呪文をつぶやき

祝：いきなりその場にぶん投げる。

ＧＭ：がしゃん、という音とともに散らばった算木をしげしげと眺めると……

祝：「あまり相性はよくなさそうにございますね」

佐藤：「相変わらず奇行にしか見えないね」

桐島：「ふーん」

桜庭：「そう、で？」

雨宮：「ハハハまあ占いなんてたいていそんなもんだろう？」

桐島：「んだなあ」

祝：「でも大丈夫！　たとえそこまで仲が良くなくとも、小生のおすすめするハッピー開運グッズを身に着けていれば……」

祝：「あっというまに校則違反スレスレの恋愛事情を繰り広げられるほどになれるのでございますよ！」

雨宮：「おいおいソッチの方向はやめたまえよ」

佐藤：「怪しい壺 10 万円で買わせる仕事でもしてるのかい」

桐島：「悪徳商法じゃねえか」

桐島：「コイツ風紀委員だぞ」

桜庭：「占い師じゃなくて詐欺師じゃん。」

桜庭：「取り調べされたいの？」

祝：「ま、まさか！　金銭はいただきませんとも！」と大げさに首を振る

祝：「ほ、ほら、よくあるでしょう？　赤いパンツを履いてるとその日一日元気に過ごせるとか……」

祝：「ああいう手合いでございますよ、小生の占いは！」

雨宮：「なるほどね…」
桐島：「朝のニュースでやってる星座占いみたいなやつな」
桜庭：「なんか、結構可愛い占いだね。取り調べとか言ってごめんね。」
桐島：「清羅が真面目に風紀委員の仕事する場面が見られそうだったのにな」
桜庭：「普段も真面目にやってるわ！ちょっとお目こぼしが多いだけだから！」

雨宮：「よしじゃあ佐藤さん、今日のラッキーアイテムはピンクのパンツだ」
雨宮：「今決めた」
佐藤：「それで私にどうしろって言うんだい」
桜庭：「いいねいいね、派手なの着ると気分も上がるよ？」
桐島：「（急に立ち入りにくい話題に移行したな……）」
雨宮：「履いてスカートを着て高い階段の上で立ってじっとしてると人気が上がるでしょう」
雨宮：「以上ノイマン占いでした」
桜庭：「風紀！さすがにそれはＮＧ！」
七種：「それは占いではなく男の下心を用いた統計学ではないか……？」
桐島：「（あいつ突っ込みやがった……勇気あんな……）」
桜庭：「当事者からの貴重な意見かな？」小突く
佐藤：「私はしずかーな方がいいんだよ 調べものの為に人と話すことは多いけどさ」
雨宮：「ははは」

祝：「……ほんじゃらふんじゃら……ムッ！　出た！　出ました！」

ＧＭ：君たちの話を聞いていたのかいないのか
ＧＭ：いつの間にか再び謎の占いを実行していた祝は、急にみんなのほうへ振り返る

祝：「えと、桐島……さんの開運グッズが判明しました！」
桐島：「お、なんだ？」
祝：「ふふ、ふ……まあ落ち着いて聞いてくださいよ……」
祝：「ずばり！　あなたの開運グッズは！」

はいＢＧＭ！　と七楽を指すと、イヤそうな顔で七楽はスピーカーを起動してドラムロールを流す(*3)

祝：「……髪の毛がピンクでダテ眼鏡をかけた高等部２年のちょっと背の低いピアスを付けた女子高生！」
祝：「い、いいですか！　このグッズ……いや、特徴に当てはまる人物と一緒にいれば！」
祝：「今日からあなたも勝ちまくり！　モテまくり！」

桜庭：「えらくピンポイント！」

佐藤：「…うわー」ววววว(後退)
桐島：「ふーん」
桜庭：「ちょっと待ってな今から肉体再構成する。」もちろんできない(*4)
祝：「だ、だめだめ！　こういうのは天然モノじゃないと意味がないんです！」
祝：「いやあこまったなあ……そんなピンポイントな生徒さん、なっかなか見つかりませんなあ……」
桐島：「そだな。奇抜な髪色してるのが多いうちと言えど他に色々条件ついてりゃあな」
祝：「でしょうとも！　いやほんと……何処にいるのか！」
祝：「見当も！　つきませんな！」
ＧＭ：ずずい、と近寄る。

佐藤：「ねえこれどう反応すればいいんだい…？」元の位置に戻って周りにひそひそ
雨宮：「鈴音…君そんな子だったっけ？」
桐島：「近くね？」
祝：「開運のためには身に着ける勢いでないと効果を発揮せんのです！」
桜庭：「不純！風紀！離れろ離れろ！」
雨宮：「おっ修羅場か？」

桐島：「……ははあ。分かったぞ」
桐島：「お前バカだな？」
祝：「バ……な、なにをそんな事実無根なことを！」
桐島：「言動全部……かな」
祝：「小生はいつだって真面目だし数学も１回しか赤点をとっておりませんよ！」
雨宮：「啓一、事実だからってなんでも言っていいってわけじゃないよ」
雨宮：「あと鈴音は勉強教えてあげようか？」
桐島：「それもそうか。すまん事実を伝えて」
祝：「あ、あとでね！　勉強はあとで……」苦笑い
桜庭：「いいぞもっと言ってやれ雨宮さん！」
桜庭：「勉強しないからトンチキな占い結果がでるんじゃない？」

佐藤：「まあうん…色恋沙汰はよくわからないけれど…相手に迷惑かけるものじゃないと思うようん」
祝：「迷惑だなんて！　むしろこのわた」(*5)
祝：「いや！　開運グッズと一緒にいれば、どんどん幸運になるのですよ！」
祝：「逆に！　逆にむしろ一緒にいなければ！」
祝：「小銭を落とせば側溝に転がって取り出せなくなるし、買おうと思ったモノは大抵売り切れている。電車やバスの席は目の前で埋まるし、シャーペンの芯は折れるし！」
祝：「ほんとロクでもない運勢になってしまうのですよ！」
祝：それでも良いのですか!!と再び詰め寄る
桐島：「確かに最近そういう不運には見舞われてはいるが」

ＧＭ：ではその言葉を聞くと
ＧＭ：彼女はびくりと体を震わせる
祝：「え……うそ……」
祝：「……い、いや。それは偶然ですよォ」
桜庭：「さっきまで意気揚々とまくしたててたのに急に歯切れが悪くなってどうしたの？」
佐藤：「…ねえ祝さんや」
佐藤：「またなんか怪しい変なオカルトに手を出してたりしないかい？」
祝：「オカルトは怪しくてナンボですよ！」
祝：「……まあ、さすがに以前のサルのミイラみたいなのはもう買ってませんけど」
七種：「ああ……あの更衣室を異常にカビさせた原因とかいう、あのミイラか」
桜庭：「睾丸で精力剤が作られて裏で売り捌かれてたあれか…」
七種：「あれでだいぶ稼いだ人間も出たらしいな……」
桐島：「知らない内に事件起こりすぎなんだよなこの学園島…」
祝：「おかげで風紀委員会にたっぷり絞られて……部費も削減されて……」
桜庭：「へへへ、その節は大変だったなぁ。」
桐島：「当然だわな」
佐藤：「まあ懲りた方がいいよ一回、むしろ懲りるまで」

祝：「そう！　アレ以来、怪しすぎるものには手を出さないようにしたのでございます！」
祝：「だからこそ、こうして人を幸せにするハフリ式開運術で占い行脚を行っているのです！」
祝：「そして、その結果！　桐島……さんにぴったりの開運グッスが見つかったのですから！」
桜庭：「逆ナン行脚じゃなくて？」
佐藤：「閉運術じゃなくて？」
祝：「こんなやり方したの桐島さんだけですよ！」
桜庭：「ふーん…やっぱりそういう目で見てたんだ…」
桐島：「これも不運、か……」

祝：「……こほん、まあ信じる信じないはアナタ次第ですし」
祝：「小生はいつでも占い及び開運相談を受け付けていますので」
祝：桐島の手を取ると
祝：「御用がある場合は、ぜひオカ研へお立ち寄りを！」

桐島：「あったらな」
桜庭：「やめといた方がいいよ。風紀委員会の方が多分頼れるよ。生徒会でも番長連でもいいからそいつだけはだめだよ…」
雨宮：「じゃあ私も、女の子の好感度が聞きたくなったらいつでも電話していいよ啓一」
桐島：「じゃあ後で電話するわー」
佐藤：「いやあめんどくさいことになってるねぇ…ジュースでも買いにいくかい？」肩に手を置いて

七種：「……ルート選択ミスったら血が見えそうだな、桐島」
桐島：「一つ言っていいか？七楽」
七種：「ふむ？」
桐島：「俺に非なくない？」
雨宮：「ある」
七種：「だ、そうだ」
桐島：「きっつー」
佐藤：「ご愁傷様」
桜庭：「モテる、それが罪。」
雨宮：「この世に生まれたことが罪…みたいな…」
桐島：「原罪背負っちゃったかー」
七種：「気軽な原罪もあったものだな……と」

七種：「占い……占いね」
七種：「そんなら、余はこの雨があとどれくらいで止むのかを占ってほしいのだがな」
GM：と、窓の外を指す。
祝：「ああ、この雨ですか？」
祝：「この雨ならもうすぐ止みますよ」
GM：何の気なしにそう言ってのけてから
GM：ふと何かに気付いたように、口へ手を当てる。
祝：「あ……えと、そう！　この占いの結果によれば……あと10秒くらいで！」

佐藤：「じゃあ10秒数えてみるかね」
祝：「えっいやそれは……」と慌てる
桐島：「10ー」
桜庭：「9ー」
佐藤：「8ー」
雨宮：「7、6、5、4、3、2…」ノイマンなのでコンマ秒すらきっちりと正確に刻む
桐島：「皆で数える流れが！」

GM：では、君たちが正確に10秒をカウントし終えた直後
GM：不意に、窓の外から聞こえてきていた雨音が消える
GM：代わりに、まぶしいばかりの斜陽が下駄箱を照らし始めた

七種：「……これは、たまげたな……」
雨宮：「おやこりゃすごい」
桐島：「おー、止んだ止んだ。やるじゃん」
雨宮：「将来はお天気キャスターかい？」
桜庭：「え、なに、マジなの…？」呆然とする
佐藤：「…なんか変なオカルトはまって変なことになってない？本当に？」

祝：「……」
祝：「……あっ！　ああーこれはえーっとその」
祝：「これも小生の守護龍のお導きなのです……なむなむ」手をこすり合わせる。

桐島：「清羅ー帰ろうぜー。じゃあな皆の衆、また明日」
佐藤：「なんかうさんくさ…」「はいそれじゃあまた明日ね」
桜庭：「うん、なんか疲れたしね桐島くん。じゃあ文殿寮組の皆さんまた明日ー。」
七種：「う、うむ。また明日」と手を振る。
雨宮：「ふむ、ではまた」

桜庭：「じゃあね祝さん！寮違うからついてきたりしないよね！」
祝：「し、しませんよ！　小生まだ学校に用事がありますし！」
祝：「ほんとに……用事が残ってます、し……」
桐島：「ははははいくらラッキーアイテムつったって寮までは来ねえだろ」
桜庭：「はい一勝ー！」
桐島：「おめー」
祝：「ぐぬ……幸運になりたかったらいつでも声をかけてくださいよ！」と桐島さんに手を振ろう
桐島：「気が向いたらなー」
七種：「こりゃ望み薄だな……」
雨宮：「やれやれ…」
佐藤：「繰り返すようだけど相手の事も考えてなー」
祝：「もちろんです！　桐島……さんには幸せになってもらいたい」
祝：「これはウソ偽りのない、小生の気持ちでございますから！」

ＧＭ：ともかく！　と手で服を払うと
祝：「小生はまだオカ研の用事がありますので、これにてお暇させていただきましょう」
祝：「お三方も、幸せになりたかったらご相談はいつでも受け付けておりますからね！」
佐藤：「お気持ちだけ」
祝：「あと七楽！　あんたはもっとちゃんとＢＧＭ流して！　ボンクラ部の部長さんに言いつけるよ！」
七種：「それは勘弁してくれんか……」

ＧＭ：ふん、とメガネに手をやると、
ＧＭ：祝は皆さんに背を向けて校舎へ帰っていきます

佐藤：「やれやれ…前途多難そうで」
桜庭：「七種くん、あいつにパワハラされたらいつでも言ってね！」
七種：「まあ大丈夫であろう、これも高貴なる者の務めよ」

桐島：「やってること下っ端だけどな」
七種：「ふ……精神的な高みというやつは、時として行動からは測りがたいものさ」
七種：「……さて、余も寮に帰るか」
ＧＭ：いつまた降り出すかわからんからな、と玄関口に歩き出す

佐藤：「さてまあ…私は購買寄って帰るとするかね。なんか喉渇いたわ」
佐藤：「んじゃまあお疲れー。あ、なんか欲しいのある人は購買来るなら何か奢るよ？」
雨宮：「ではスペリオルミックスを」
佐藤：「おおう…それはまあ…買えたら、ね？」

という流れで購入判定へ。
結果、佐藤がスペリオルミックスの購入に成功、これを雨宮へ渡すことに。

雨宮：「冗談だったのにほんとに取ってきてくれるなんて。 列に並んだかツテでもあったか」
佐藤：「はっはっはーこれも人徳ってやつよ」
雨宮：「人徳か。 いいね、そういうの。 流石は私の見込んだ人物だ」
雨宮：「助力のしがいがあるよ」
佐藤：「うんうん、１年の頃は学生生活もまともに満喫できなかったしね」
佐藤：「ぜひとも仲良く色々助けてくれるとありがたいね！」
雨宮：「まあ心配は要らないさ」
雨宮：「悪から離反した正義のひと。主役にふさわしい。 どうあっても君は活躍する運命にあるとも。 断言してもいい」
佐藤：「まあ、正義とまで言われると同意しかねるがね…喜ばしく思っておこう」
雨宮：「うん、その意気さ」
佐藤：「では、引き続き友人としてよろしく頼むよ」

●

「……まさか、そんな」

部室に向かって歩いていた祝は、ふと足を止めると、ひとり呟き続ける。

「ううん。絶対違う」
「だって……小生の守護龍様は……」
「あの雨……本当に……」

「龍が降らせた……のかなあ……」

（*1）
佐藤が持つハヌマーンのイージーエフェクト《高濃度酸素バブル》のこと。学園内では基本的にエフェクトの使用が禁じられており、些細な使用方法でも見咎められる場合がある。
とはいえ、実際には実害がなければ見逃されることも多いが。

（*2）
ノイマンのイージーエフェクト《代謝制御》のこと。脳神経を完全にコントロールし、消化・免疫機能から感情までを制御する能力。

（*3）
桐島：「お前……」と少し引いた表情で七楽を見つめる
七種：「余だって別にやりたくてやっているわけでは……これも部活動の一種なのだよ」
桐島：「友達は選べよ。少ない中から選べってのも酷な話だけどな……」
七種：「少ない前提で話すな！」
桜庭：「私は友達だよ七種くん…」哀れみながら

（*4）
桐島：清羅がばぐった
桜庭：友人と相性占いされて相性悪いとかいわれた挙句逆ナンかまされたからな
GM：ぶん殴られてもおかしくない所業では…？
桐島：こんな逆ナン見たことねえ！
佐藤：そうだね

（*5）
桜庭：「ギルティ！このわたしって言おうとしたコイツ！」
佐藤：「海鼠腸」
桐島：「旨いよな」

▽シーン２：懸念

クリス＝ブラッフォード（クリス）：「……オルクスのエフェクトを用いた不法な菜園の作成が１件」（*6）
クリス：「以上で先週発生したエフェクトの不正使用に関する報告を終わります」

――局所的豪雨が話題になり始めてから数日後の午後。
高等部校舎に程近い、警察署のような雰囲気を漂わせた建物、風紀委員会本部にて。
定例会議の終わり際、活動報告を終えた生徒が着席すると、代わってベアトリス・ハックマン（*7）が前に立つ。

ベアトリス・ハックマン（ベアトリス）：「先週だけで14件、か」
ベアトリス：「一時期に比べればマシとはいえ、頭の痛くなる件数であることには違いない」
ベアトリス：「いや……たとえ件数がゼロになったとしても、我々の活動に終わりはない」
ベアトリス：「今後も気を抜かずに、我々風紀委員会は……！」

桜庭：「…イージーエフェクトくらいほっといても…」ぼそりと呟く
クリス：「しっ！　今目をつけられたら面倒でしょ!?」
クリス：小声で注意するが、幸いベアトリスには聞かれなかったようだ
桜庭：「睨むときの目つきも凛々しいよね…」
クリス：「……ちょっと、聞いてる？」やや引き気味

風紀委員会の理念、今後も努力を惜しまず、高い良識をもって職務を遂行し……
いつもの通りに委員長が未来への展望を話し始めると、気の早い生徒は隠れて帰り支度を始める。
委員会の会合は、ほぼ必ずベアトリスの抱負で締められることを知っているためだ。

桜庭：「ブラッフォードさん、マカロン買って帰ろ？」
クリス：「また急ね……ま、いいけど」
クリス：「それじゃあ、委員長のアレが終わったらさっさと買い物に行きましょ」
桜庭：「よし、なんか新商品あるって聞いたからさ…」
桜庭：すぐ帰り支度をする筆頭の清羅は完全に気が抜けている

そんな生徒たちに気付くこともなく、ひとくさり語り終えた委員長が、とん、と机の上に手を置くと。

ベアトリス：「以上で本日の会合を終了とする。では、解散！」
ベアトリス：「……ああ、そうだ。桜庭！　ちょっと来てくれるか」
ＧＭ：と、ふいに声をかけられた。

桜庭：「え、あ、はい！去年の告白の返事ですか！」「ブラッフォードさん、先帰ってて。」小走りでハックマンに近寄る

ベアトリス：「悪いな、個人的に少し頼みたいことがあるんだ」

桜庭：「何でもどうぞ！」

ベアトリス：「ありがとう。あと返事だがＮＯだ。今はまだ風紀委員会としての活動に力を入れていたいのでな」さらりと答えた後

桜庭：「ああ、二回目の失恋…」

ベアトリス：「……桜庭、「大風水羅盤」について、何か知っているか？」

桜庭：「最近、同じ名前の縁起がよさそうな悪そうな建物ができたのは知ってます！」

ベアトリス：「そうか、耳が早いな……」

ベアトリス：「頼みたいことというのはそれ絡みでな」と腕を組み

ベアトリス：「桜庭。お前に大風水羅盤の監視を頼みたい……やってくれるか？」

桜庭：「はい！」食い気味に

桜庭：「四六時中見張ってやります！なんなら立ち入り捜査もしますよ！」

ベアトリス：「い、いや……そこまではしなくていい」

ベアトリス：これは風紀委員会としてではなく、私個人の頼み、ということになるからな、と前置き。

ベアトリス：「故に、学業に差し支えない範囲で構わん。何もなければそれでいいんだ」

桜庭：（これはめっちゃ信頼されているのでは？テンション上がっちゃうね！）

桜庭：「はい！学業は言っちゃなんですが余裕なんで大丈夫です！これでもノイマンの端くれですから！」

ベアトリス：「うらやましい限りだな。だがそれなら安心だ」

ベアトリス：「問題の羅盤とやらだが……またぞろ、オカルト研究部が関わっているようなんだ」

ベアトリス：「ミイラ事件以降、ずっと大人しくしていたんだが……ここにきて急に動き出してな」

桜庭：「へぇ、この間オカルト研究部のやつと会いましたけどそんな素振り…ありました！」

桜庭：「めっちゃ怪しいのがいました！」

ベアトリス：「ふむ……名前は？」

桜庭：「祝　鈴音です。同クラです！」

ベアトリス：ぱちんと指を鳴らす

ベアトリス：「ビンゴ。彼女が羅盤の制作を主導しているらしい」

ベアトリス：「お前が見て怪しいというならまあ、相当だろうな」

ベアトリス：「では、羅盤同様、彼女のこともそれとなく見張ってくれるか」

桜庭：「へぇ…」シメる口実ができそうな予感に胸を馳せる

桜庭：「はい！満足いく結果を出してみせます！」

ベアトリス：「頼むぞ。報告によると、このところ問題児の桐島にヤケに懐いていると聞くし」

ベアトリス：「何かを企んでいる、というわけではなさそうだが……いずれにせよ警戒するに越し

たことはあるまい」
桜庭：「ふーん…私の知らないところであの女…」
桜庭：「まあ、桐島くんにもよく言って気を付けさせます。」
ベアトリス：「そうしてくれると助かる……さて」
ベアトリス：と、手元に散らばっていた資料を軽くまとめると

ベアトリス：「では改めて、桜庭 清羅」
ベアトリス：「大風水羅盤の監視、しっかり頼むぞ」と肩を叩いて部屋を出よう。
桜庭：「はい！…肩触られた…期待されてる…嬉しい…」しばらく呆けたあとに校舎を後にする

（*6）
佐藤：この世界あの子いるんだ…
桐島：ダメだあの面見る度にクソダサ仮面が想起される
ＧＭ：多分入学式できっちり事件を起こした世界線だ！
クリスは「ディスカラードレルム」掲載のサンプルシナリオに登場するＮＰＣ。過去のトラウマからオーヴァードであることを鼻にかけ、能力を持たない一般生を見下しがちな女生徒。詳細は省くが、あるタイミングで彼女は学生服にマント+目元を隠す仮面というアレな恰好で登場する。

（*7）
学園の自治組織の中で、最も権威と力を持つ風紀委員会の委員長。
〝サイレントノイズ〟の名を持つハヌマーン／オルクスのクロスブリードで、数少ないＳランクのスペシャリストということもあり、彼女の〝領域〟は学園内でも指折りの広大さである。でもいろいろ振り回されがち。

▽シーン３：取材

風紀委員会の定例会議と同じ頃、文殿寮(*8)の前にて。

プリシラ・カルハバル（プリシラ）：「イヤー、取材の手伝いさせてごめんＮＥ！」

雨宮は報道部の部長にして、学園一の情報通、プリシラと向かい合っていた。

雨宮：「ははは、いいんだよプリシラ。 君は主役ではないけど名脇役だ。 その手伝いができるなら私の時間も惜しくない」

プリシラ：「おお、なんたるイケメンムーヴ！」大仰に驚いて見せよう

雨宮：「とはいえ私の言動センスはこの通りアレなんで、取材の進行は任せないでねさすがに」

プリシラ：「いやいや、同行してくれるだけでもとってもありがたいのＹＯ実際！」

プリシラ：「やっぱ寮生がいると取材がスムーズに済むからＳＡ！ 本当助かるＹＯ！」

雨宮：「ははは、そう言って貰えると悪くない気分だ、実際。 さてでは早速行ってみようか？」

プリシラ：「オッケー！ そんじゃ行ってみようか！」

と、文殿寮への取材を開始した二人。難易度７ の＜交渉＞に成功した雨宮は、

・「雨が降るときは決まって日が昇っている間」
・「人によってはヘンな音を聞くこともある」
・「妙な影が空を横切るのを見た」
・「幸運は数日間は続く」
……という情報を得る。

プリシラ：「ンー、これくらいネタがあれば誌面も埋まるかＮＡ」

雨宮：「日が昇っているときの雨…」

雨宮：「天気雨、または狐の嫁入り…かい。 ……あんまり好きじゃないんだよなぁ、あれ」

プリシラ：「へぇ……そういう呼び方もあるのＮＥ」

プリシラ：「差し支えなければ、その理由を訊いても？」と一瞬で記者の顔になる。

雨宮：「ハッキリしている方が好きだからさ。 晴れてるなら晴れ、曇りなら曇り、雨なら雨、雪なら雪」

雨宮：「晴れてるのに雷が思わせぶりにゴロゴロ鳴るとか。 小雨が断続的に降ったり止んだりとか」

雨宮：「そういうの、不安にならないかい？」

プリシラ：「ホーウ、なかなか面白い着眼点ＮＥ」

プリシラ：「わたしはホラ、そういう不安や不信はむしろ解き明かしたいタイプだからＮＥ！」

プリシラ：「見てるとワクワクしてくるＺＥ！」けらけらと笑う。

雨宮：「うん、いいね。 そういう話を聞くと」

雨宮：「やはり私は脇役なんだと実感できるから」
プリシラ：「そんなものかＮＡ……あ！」

と、プリシラが指さした先には、まだ話を聞いていない女子生徒

プリシラ：「んじゃ、あの娘へのインタビューが終わったら終了にしましょ！」
雨宮：「いいとも、付き合うさ」
プリシラ：「ヨーシ、では……おーい！　そこのお方！　ちょいとお話ＷＯ！」
土浦 菜南（土浦）：「あ、はーい！　なんですかなんですか！」

彼女が駆け足で近寄ってきた……その時。
ふいに奇妙な音が二人の耳に飛び込んでくる。
深く澄んでいるような、それでいて妙に不安を掻き立てる、聞き覚えのない音。

プリシラ：「……なにこれ、未羽サン、聴こえる？」
雨宮：「聞こえる……が、なんだいこれ」
土浦：「あれ、どうしたの二人とも……」
ＧＭ：耳をそばだてる２人の肩に、ぽつぽつと雨のしずくが当たった……かと思うと
ＧＭ：前触れもなく、滝のような大雨が頭上から降りかかってきた
雨宮：「ぶぇ!?」
プリシラ：「わああッ！　ノートが！　ノートがびしょびしょに！」
土浦：「わっ！　二人ともこっちこっち！　寮に入ろう！」
雨宮：「ひぇぇー」そっちに向かいます
ＧＭ：では、３人が寮の中に引っ込むと、雨脚はますます強くなる。
プリシラ：「うへぇ！　ひどい目に逢っちゃったＮＥ……」
雨宮：「なんてこった……こんなことが起きるなんてショックだよ」
土浦：「ほんとほんと！　今日降るなんて予報にもなかっ……あれっ!?」

タオルを持ってきた寮生が目を丸くして外を指す。
気が付くと、玄関の外はまるで雨などなかったかのように晴れ渡っている。
地面にできた水たまりも、見る間に渇いてゆき……５分もすれば跡形もなく消えてしまうだろう。

雨宮：「ああショックだ。年頃の男子が居れば名イベントになっただろうに…」
雨宮：「ここには女子だけだとは！あ、止んだね」
土浦：「おおー！　雨に濡れたうなじ！　透ける制服！　いいねえ！　青春だよ！」
雨宮：「おおノリがいいねえ君、囚われのヒロイン適正あるよ」
プリシラ：「写真が載れば校内新聞も部数うなぎ上りだＮＥ！」（*9）
土浦：「ヒロイン!?　いやあ前ちょっと事件に巻き込まれたけどわたしそんな性質じゃ……」

土浦：「いやそうじゃなくて！　ひょっとして……今のが幸運の通り雨!?」
雨宮：「へぇ？」じゃあサイフから硬貨を取り出して何度か弾いてみます
ＧＭ：では、オモテ面だけが不自然なくらいに何度も出るでしょう
雨宮：「うひょーこりゃすごい。　えーと菜南さん？　1000円賭けてポーカーしない？」（*10）
土浦：「お、賭け試合ですか？　いいでしょう……わたしだって雨に当たったんだからね！」

だが、雨宮は同時に今の雨から、微量ながらも奇妙な感覚を覚える。
体の中のレネゲイドがざわつく感覚……この雨からは、エフェクトの影響を感じる。

プリシラ：「フーム、同じくらいの幸運を授かったモノ同士が勝負を……」
プリシラ：「……ネタにはなるかもしれないけど、これはどっちかっていうとオカ研向けかしらＮＥ－」
雨宮：「レネゲイドか……そりゃやっぱり事件の予感だね、しかし…」
雨宮：「雨が関係したエフェクトか…」
雨宮：「なんというか、運命を感じなくもないね」
プリシラ：「ん、どうかしたＮＯ？」

……どうやらエフェクトの気配に気づいているのは彼女だけのようだ。

雨宮：「おや。　やっぱり因子的なのを感じちゃった系か」
雨宮：「あれでもプリシラ、君もオルクスじゃなかった？」
プリシラ：「そうだけど……なにかあったＮＯ？」
雨宮：「？」
雨宮：「…いや、なんでもない。　いや…ほんとになんでもなくあってほしいんだけどな」
雨宮：「ともかく…分からないなら言うけど、雨にエフェクトを感じた。　幸運、雨…多分オルクスだ、でも…」
雨宮：「…私がわかったことはできれば秘密にしてほしいな。　他の人がわからない事をわかってしまうのは、よくないから」
プリシラ：「……つまり、守秘義務ってことＮＥ」
プリシラ：「うん、わかった！　それじゃこれは未羽サンがＯＫするまで止めておきましょ！」
プリシラ：その代わり、と人差し指をびしり
プリシラ：「ＯＫが出たら、独占取材させてもらうからＮＥ！」
雨宮：「そういうのも主役の役目…　まあ、仕方ないか」

（*8）
学園を代表する寮の一つ。データ化されたライブラリや学習用の部屋などが用意されている。雨宮・佐藤・七種の部屋はここ。

（*9）

桜庭：1部下さい

GM：風紀委員会へのワイロだこれ

佐藤：ダメな人しかいない…

桐島：風紀委員はさあ…

桜庭：権力は腐るもの…

桐島：こいつ…

桜庭：元々不良気質だから仕方ない

（*10）

桐島：不良が増えたぞ！

桜庭：賭博は風紀どころか警察案件

▽シーン４：羅盤

「よっしゃ、このあたりでよかろ！」

プリシラの取材が終わったちょうどその頃。高等部校舎裏、山岳地帯のふもと。
佐藤は何とも妙な二人と一緒に、森の中腹で汗を拭いている。
何やらメカメカしいシルエットの方は七楽。現在は歩行支援機を山菜取りモードへ変形している。
もう片方、もはや人の形すらしていない方が、彼女をこの森へと連れてきた張本人。
島内ボランティアクラブの部長(自称)、ハコベだ。

七種：「なあ部長……本当にここにあるのか、例の、ええと」
函辺：「大風水羅盤の材料、イグサとセンダンの枝ならまず間違いなくここにあるのよ！」
函辺：小学生女子のような甲高い声でそう笑う

佐藤：「その大風水羅盤ってやつ？ ここまで手間かけて作る必要あるのかねぇ」
函辺：「ははは、正直意味はないんじゃなかろうかね！」
函辺：「だが、我が島内ボランティアクラブに寄せられた貴重な依頼だ」
函辺：「放り投げるわけにはいくまいよ……そのために、こうしてキミという人員もつれてきたわけだしな！」
佐藤：「まあ、変人の部長がいるところには変な話飛び込んでくるしね…情報源として重宝してるよ」
佐藤：「所属する気はないけど」
函辺：「む、残念」と後ろ手に用意していた入部届を仕舞う。
佐藤：「ま、こうやって協力してるんだからそれで満足してくれさ…さてどこにあるのかね」
函辺：「応とも。こっちだ」
ＧＭ：一人で森の奥へずいと進んでゆく。

函辺：「以前、別の部の要望で新月の夜に姿見を持ってこの森に入った時ちょうど……おや？」
佐藤：「おいおい置いてくんじゃないよ…どしたい？」
ＧＭ：その声には答えず、びっ、と戦闘用ぬいぐるみの指を立てる。
ＧＭ：そして「ゆっくり近付いてこい」のハンドサイン。
佐藤：「む…」真面目な顔しとこう
七種：「どうせまた変な雑誌でも落ちてたのであろう……」と呆れ顔で近付く。

……ハコベが軽くかき分けた草木の先に、
森の中、ほんの少しだけ開かれた、陽光の差し込む小さな広がりに、
奇妙な生き物が、蜷局を巻いている。

佐藤：「…おや？」

七種：「……部長、佐藤氏」
七種：「余は、その……目がおかしくなったのかもしれんが」
七種：「あれ……ドラゴン、じゃない、よな？」
函辺：「どっちかっていうと、フォルム的には東洋のドラゴンだな」
佐藤：「湖にいる方の竜だね」

彼女の言う通り、ヘビにもにた朱色の龍が、目の前に鎮座している。
短い間隔で細長い姿態が上下することから、呼吸はしているようだ。

函辺：「……さて、あのドラゴンのいる向こう側に材料があるのだが」
佐藤：「誰かのいたずらってわけでもないならレジェンドのレネゲイドビーイングってところかな？」
七種：「なるほど、レネゲイドビーイングなら納得はできるな……」
函辺：「まあ正体がなんにせよ、アレには退いてもらわんとな」
佐藤：「何か策はあるかい？」
函辺：「まずはプランAだ」
函辺：「七楽と佐藤さんがドラゴンの前まで歩いてゆく」
函辺：「次に、ドラゴンを優しく起こす」
函辺：「そして退いてもらう。以上だ」
佐藤：「随分と他力本願だね？」
函辺：「オイオイ、このハコベはオーヴァードとはいえか弱い一般高校生なんだぜ」
函辺：「ここはメカで武装している七楽や、強者オーラのある佐藤さんに任せるのが道理というものさ！」
佐藤：「私だって一般高校生というか私の方がか弱い女の子なんだが？」（*11）
函辺：「か弱い？　どこが？」
七種：「……ええい、もう良い」
七種：「余が行く。どうせ誰かが行かにゃ終わらんのだろ！」
七種：「部長も、佐藤氏も！　それでいいな？」
佐藤：「おお助かるね、健闘を祈る」
七種：「縁起でもないことを……」

憮然とした様子で七楽は立ち上がると、ガシャガシャと駆動音を立てて龍に近づいてゆく。

七種：「んん、ん……あーあー、よし」
七種：「そこな龍よ！　お初にお目にかかる！　余は七種七楽と申すものだ！」
七種：「貴殿を傷つける意図はない！　ただちょっと頼みがあって……うわっ!?」

奇妙な宣言と共に七楽が近づいて行っても、龍は反応を示さなかった
……ある一定の距離までは。

がしゃん、と一歩を踏み込んだ瞬間、３人の周りの空気が急激に重くなる。

函辺：「なんかマズそうだな……佐藤さん、一応覚悟しておけ」

佐藤：「はいはい」

七種：「い、いや本当に害する意図はなくて……！」

しどろもどろになる七楽の前で、龍はゆっくりと顔をこちらへ向けた

……顔がない。

というよりも……龍の顔に当たる部分が、どうしても認識できない。

佐藤：「へえ？」

七種：「な、なんだ……これは……？」

顔のない龍は、しばらくじっと顔を３人に向けていたが、不意に、その姿がかき消えた。

佐藤：「ふうん…」姿のあったところに行ってみようか

ＧＭ：では、龍のいた場所に、奇妙なかけらが落ちているのを見つけられるだろう。

ＧＭ：石のような、木片のような……佐藤さんはこれに覚えがあるかもしれない。

その場に残った奇妙な欠片の詳細を探るべく、難易度８の<情報:アカデミア>に成功した佐藤は、それが「仮面」の一部であることに思い当たる。

より正確に言えば、それは「堕落の仮面」と呼ばれるＥＸレネゲイドであることに……。

佐藤：「やれやれ…また何かやってるのかね彼らは」

佐藤：「ま、となるとちょっと連絡しときますかね…」せんせー！変な仮面みつけましたー！

被害こそ出なかったものの、不穏な情報を入手した佐藤はスペリオルミックスを購入しつつ(*12)報告へ動く。果たしてあの龍は何だったのか……。

(*11)

雨宮：えぇーほんとにござるかぁ

佐藤：肉体と感覚は1だぞ！肉体と感覚は！

桐島　啓一：俺も俺もー

桜庭：ところでこの社会と交渉攻撃なんですが…

佐藤：ふふ…

ＧＭ：コワ～…

（*12）

雨宮：１日10 本がＰＣ達に消費させられてゆく

桜庭：エフェクト使わないはずの一般生徒に侵蝕おさえる飲み物なんて要らないよね？

ＧＭ：有効活用といっていただきたい

◆ミドルフェイズ

▽シーン５：幸運

森の龍との出会いと時を同じくして、午後のセントジョージ寮。
授業を終え、なんとはなしに自室にいたキミのもとに、彼女はやってきた。

「こんにちはー」

桐島：昨日寮まで来ねえって言ったら来やがった！
祝　鈴音：来ちゃった
佐藤：ストーカー…
桜庭：この女ァ…

桐島：「あー？どうかしたか？」
祝：「別に……何がどうしたというわけでもないですが」
祝：「ほら、何となく会いたくなる時ってあるでしょ？」と笑いかける
桐島：「にしたってわざわざここまで来るか？鈴音の寮は文殿だろ？」
祝：「これくらいの距離なんて、大した障害でもございませんよぉ」
桐島：「元気だなあ……ま、入れよ。茶菓子くらいはあるからよ」
祝：「うへへ……お邪魔します」
ＧＭ：やや顔を赤らめながら、祝はキミの部屋に入ってくる。
桐島：というわけで緑茶と羊羹を出そう
ＧＭ：渋い！
祝：「ホッとする味ですねぇ……」と堪能しよう

桐島：「で？本題は？」
祝：「……もうちょっとゆっくりお話ししていたかったんですが、まあいいでしょう」

ごそごそとポケットを漁ると、
祝はいくつかの棒を取り出し、桐島の前に並べる。

桐島：「それは？」
祝：「算木ってやつでございます。要は占いのための道具」
桐島：「好きだなあそれ。俺は別に占いにゃあ困ってないぜ？」
祝：「占いはなんてったって小生のアイデンティティにございますから！」
祝：にへらりと笑うと、棒のうちの１本を取り上げて、桐島の前に差し出す。

祝：「さて、細かいことは抜きにして、このバッテン印の棒」
桐島：「うん」
祝：「10 本のうち、これを引き当てると、桐島くんは幸運になれます」
桐島：「ふ～ん」

目の前でバツ印の棒をふらふらと振ると、そのまま床に落とす。
そして、ほかの棒と一緒に、かちゃかちゃと音を立ててかき混ぜてしまう。

祝：「さて、これで今棒がどこにあるのかはわかりません」

そして、床の上に広げた棒の上に、さらにハンカチをかぶせ、完全に見えなくしてしまう。

祝：「……桐島くん」
祝：「今、このハンカチの下の棒、どれでも 1 本、好きなものを拾ってくださる？」
桐島：「どれにしようかな、っと」
桐島：choice 右から
<BCDice：桐島 啓一>：DiceBot：(CHOICE) → 10
桐島：「じゃあ左端」
祝：「んふ。左端ですね」
桐島：「おー」

GM：どうぞ、と左端の棒を指そう。
GM：……選んだ棒は「バツ印」だった。

祝：「予言、しましょうか」
桐島：「どうぞ」
祝：「桐島くんは、この棒以外を引くことはありません」
祝：「……小生と一緒にいる間は、ね」
桐島：「これが、メンタリズムです」
祝：「んふふ、そう思ってくれても構いませんよ」
祝：「なんだったら、小生が後ろを向いてる間に選んだって結果は同じですもの」
桐島：「招き猫か何かか」
祝：「それのもっと凄い版でございます」
桐島：「すげー」
祝：「そうでしょうとも」

祝：不意に棒を横に退けると、ぐいと桐島の前に近寄る。
桐島：「じゃあお前俺のとこなんかに居ないでもっといろんなとこ行ってこいよ」
祝：「そういうわけには参りません」
祝：「小生が幸せにできるのは、桐島くんだけ」

桐島：「すげーじゃん幸福まき散らすの。俺だけなんて勿体ねー」
祝：「まき散らしているわけではないのですよ」
祝：「むしろ逆……ほかの人の幸運を吸い上げて、桐島くんにだけ与えられるの」

桐島：「今すぐやめろ」
祝：「……どうして？」

笑顔のまま、そう返す。

桐島：「他人を害するのは俺が最も嫌いな行為だ。今すぐやめろ」
祝：「害するなんてそんなこと」くすくすと笑い
祝：「吸い上げる、っていうと怖がられたかもしれないけど、正確には拾い上げてるといった方がいいかしら」
祝：「世の中には、思ったよりも幸運が転がってるの。ただ誰も気づかないだけ」
桐島：「言葉遊びはいい」
祝：「……」
桐島：「聞こえなかったのか？俺はやめろと言ったんだ」
桐島：「俺はそんなものでは喜ばん。俺を喜ばせたかったらもっと多くの人を幸せにする工夫を考えるんだな」
祝：「それじゃあ」と、今度は桐島に体を預けるようにして倒れこむ。

祝：「みんなを幸せにしたら、桐島くんは喜んでくれるんですね？」
桐島：「お前のやり口じゃあ無理だろうな。俺一人を幸福にするために他所から吸い上げているお前じゃあ」
祝：「それならやり方を変えるだけでございますわ」
祝：「幸運を誰かから拾い上げるのがダメなら……そう」
祝：「モノから貰いましょう。それなら誰も不幸にはならない」
桐島：「聞こうか。幸運を取り上げられたモノはどうなる？」
祝：「知らない。やってみないとわからない」
桐島：「なら、やめとけ」
祝：「でも人は幸せになりますよ？」
桐島：「どれだけのモノから幸運を吸い上げるつもりだ？そしてその影響も分からない。論外以外の何がある」
桐島：「どんな方法でそれをやるのかは知らんが、そろそろ清羅を呼ぶぞ」（＊13）
祝：「ううん、なかなか難しいですね……小生はただ、桐島くんを喜ばせたいだけなのに」
祝：相変わらず笑顔のままでそういうと、ふいと桐島から体を引き離す
祝：「でもね、ひとつだけ教えてあげる」
桐島：「聞いてやろう」

祝：「桐島くんはね、もうすでに〝幸せにはなれないの〟」

桐島：「なんだ、そんなことか」
祝：「小生から離れると、ずっと、ずぅっと不幸が続くのよ？」
桐島：「ああ、そう」
桐島：「同じだよ、お前が居てもな」
桐島：「お前はもう少し人となりを理解するべきだと思うぜ。あまりにも俺を知らなすぎる」
桐島：「じゃあな、また明日学校で。馬鹿なことはしようとするなよ」
祝：「……はぁい」

何がおかしいのか、くすくすと笑い声を漏らしつつ、祝は部屋のドアに手をかける。

祝：「それじゃあ、また明日……そうだ」
桐島：「うん？」
祝：「今ね、校舎裏で面白いものを作ってるの」
祝：「よかったら来てみてね……明日の午後とかに、ね」
桐島：「怒られない程度にしろよ」
祝：「そうね、ヘマはしないようにするつもり」
桐島：「やらかす奴のセリフだからそれ」
桐島：「俺の話聞いてた？？？」

その疑問には答えず、ひらひらと片手を振る。

祝：「じゃあ、明日。校舎裏でね」
桐島：「……おーう」

ドアが開いて、そして閉じた。
部屋にいるのは桐島一人だけだ。

桐島：「……清羅に声かけとくか」
桐島：戸締りをしっかりする
桐島：「幸運、幸運ねえ……」

不穏な祝の来訪を退けた桐島は、購入判定でバックラーを購入することに。

桐島：今買ったバックラーを常備化してあるウェポンクラッカーに詰めて…
桐島：武器の装備枠余ってる人このバックラーを持ってくださーい
ＧＭ：バックラーは便利だからな…
桐島：少しでもディヴィジョンで耐えるHP を残すためにはやはり自衛して貰うのが最良…！
桜庭：自衛する気なくてすまない…

祝：「思ったよりはしぶとかったかしら」
祝：ドアが開いて、そして閉じた。
祝：「でも桐島くんだってすぐにわかるわ……」
祝：「幸運が敵に回ること、不運と友達になること」
祝：「そんなの、絶対に耐えられないってこと」
祝：「ね、そう思うでしょ。〝スズネ〟」

祝は上を向き、そう声をかける。その視線の先には――

（*13）
桜庭：いつでも登場して制裁を加えますよ
ＧＭ：怖い！
桜庭：悪事を働く方が悪い
佐藤：そうだね
雨宮：やべーな
雨宮：この場に居る奴らどっちも怖いぞ

▽シーン６：出現

翌朝。朝から雲一つなく、今日も暑くなるだろうという予感のする空模様。
いつも通りの朝の始まりに、しかし祝の姿はなかった。

土浦：「おはよー！　……あれっ？　祝さん来てないの？」
佐藤：「ん？　ああいないみたいだね」
桐島：「……みたいだな」
桜庭：「土浦さん、おはよー。いないね、てかあつい溶ける。」
雨宮：「やあ菜南さん。どうやらそのようだ」
土浦：「えー！　今日占ってもらうつもりだったのに……！」
ＧＭ：下敷きで顔を扇ぎながらうなだれる。
桜庭：「あいつの占いはあてに…はなるかもしれないけどロクなこと言ってこないからやめた方がいいよ。忘れな。」

桐島：「そうそう、奴が昨日俺の部屋に来たんだけどさ」
土浦：「えっマジで！？」
佐藤：「へえ？」
桜庭：「呼ばれてる？部屋に来た？やっぱあいつ…！」
雨宮：「おいおい、何のカミングアウトだい？」
桐島：「んでお前はもう幸福になれんとか脅されるついでに校舎の裏来いって呼び出しくらってさー。清羅ついて来てくれよ」
桜庭：「うんうん！行く行く！」
桜庭：「ついでに何がしたいのか聴いちゃお！」
雨宮：「なんか風紀が乱れたと思ったら果し合い的な感じになってるんだが」
桐島：「今のアイツ話通じなくてよ。俺もどうなってるのかよーわからん」
佐藤：「なかなか奇妙な話になってるじゃないか」

土浦：「うーん……校舎裏の呼び出しかあ」
土浦：「不良だったら青春っぽいんだけど、祝さん不良どころかなんかいろいろ貧弱な感じだしなあ……」
桐島：「なー」
雨宮：「まあ好きにしたまえよ、ただ何がどう転ぼうとあまり傷つけないようには…　というのは啓一には釈迦に説法だったかな？」
桜庭：「興味あるなら一緒に来る？私を手伝うならエフェクトの使用許可も出しちゃうよ。」殴り込みの気分でいる
桐島：「俺は博愛主義だからな」
佐藤：「じゃあちょっと首を突っ込ませてもらおうかね…ただの色恋沙汰なら帰らせてもらうけれど」

七種：「……朝から物騒な話をしておるなあ」
桜庭：「風紀の取締の一環でーす！」
桐島：「俺は被害者ですまる」
雨宮：「物騒な話にしたくないのであれば七楽も様子を見に行ってみてはどうだい？」
七種：「ふむ……なら余もくちばしを突っ込ませてもらおうか」
七種：「どのみち、祝氏にはいくつか聞かねばならんこともあったからな」
桜庭：「ふふ、頼もしい仲間が二人も…」
桐島：「他人から幸運吸い取ってるとか言ってたからなあアイツ」
七種：「なにそれこわい！」
桜庭：「それはますます風紀の機運が高まってきた！」
桐島：「俺一生不幸らしいぜ？どう思うよ薄幸のイケメン」
七種：「その問いかけに返事をしたら自分をイケメン呼ばわりせねばならんではないか……」
雨宮：「大丈夫七楽はちゃんとイケメンだから」
桜庭：「保証するから名乗っちゃいな。」
桐島：「新たなコードネームが出来ちまったな……」
七種：「よせよせ。高貴なる者は自らの顔にとやかく言わんものだ」
七種：「……何の話だったか。ともかくだ」
七種：「放課後に例の……校舎裏の羅盤で待ち合わせ、でいいな？」と全員に訊こう
桐島：「おっけー」
桜庭：「了解！行けたら行くはなしね！」
土浦：「むぅ……占いはまた今度か……残念だなあ」
佐藤：「草むらから覗いておくよ」

ということで、全員で放課後に殴り込みへ向かうことに。
この間に桐島はＵＧＮボディアーマーを、佐藤はすごい服を購入し、ボディアーマーは彼の手で桜庭に譲渡された。

●

……結局、一時間目の授業が開始されても、祝が教室に姿を現すことはなかった。
それ以外は特に問題もなく、焼きそばパンをめぐる昼の校内闘争や、模擬戦闘授業など、いつも通りの午後が過ぎてゆき……。
気が付けば下校の時刻。斜陽の差し込む校舎裏。

七種：「……っと、これが羅盤……か」

キミたちの前にどっしりと建っているのは、直径5m 程度、高さ 50 cm ほど。八角形のお立ち台

のような……正確には、八角形のお立ち台を粗大ごみでくみ上げたような、奇矯な盤だ。

桐島：「デカいな」
七種：「思っていたよりだいぶな……」
佐藤：「ああ、これは…」大風水羅盤かな…？
雨宮：「ふむ。何やら、民俗学的な何かのような」
桜庭：「なにこれ…ステージ？」
七種：「ステージ……確かにそういう風にも見えるな」
七種：「だが肝心の……祝氏は何処にいるんだ？」
桐島：「呼び出したくせにいねーとは…」
桜庭：「桐島くん待たせるとか良い性格してるなぁ…」
桐島：「俺なんかあぶねー奴だと思われてない？」

祝：「んふふ……どういたしまして」

くすくすという笑い声は、舞台の上から聞こえてきた
見上げれば、いつの間にか台の中央あたりに祝が立っている。

桐島：「おせーぞ」
祝：「ごめんなさい。昨日言われたことをずっと考えてて……」
祝：「ちょっとだけ、遅れてしまいました」口元を抑えて再度笑おう。
桐島：「まあ学校には大遅刻なわけだが…」
桜庭：「遅れてステージに登壇とか何？スター気取り？」
祝：「んー……強いて言うなら、主役の前の前説のつもりかしら」

ま、そんなことはどうでもいいの、と口にすると

祝：「遅れたお詫び……ではありませんけど、皆さんに一つ、占いをして差し上げましょう」
祝：「さあ、羅盤に上がってきてくださいませ……？」
ＧＭ：くいくい、と手招き。

佐藤：「えー」
桐島：「全員で登るには狭いなあ」
桜庭：「こんな怪しいの無理だよねー？」
祝：「あら、イヤならこちらまでいらっしゃらなくても結構でございますわ」
ＧＭ：こちらから行ってもよいのだけれども、と羅盤から降りる。
祝：「手間を省きたかったけれど……ノリ気じゃないのならしかたないですから」
雨宮：なんともいえない微笑で祝と啓一を交互に見ている
ＧＭ：では雨宮の視線には気付かない様子で、桐島の前に立つと
祝：「ではこちらを」

GM：と、中央に印の付いた棒を渡す
桐島：「やっぱ俺なわけね」受け取る
祝：「んふ、本当は桐島君だけでもいいのですけど……せっかくですから、皆さんの分もご用意しました」

彼女がポケットに手を入れると、同じ棒が５本、するりと出てくる。

祝：「はい、これ。皆さんも1本ずつどうぞ」
雨宮：「これは？」
祝：「算木、という道具です」
祝：「ご安心を……これ自体はただの印付きの棒にすぎませんから」
桜庭：「……」話が進まなそうなので渋々ひったくるように受け取る
雨宮：「ふむ」受け取っておこう
七種：「何をする気なんだか……」と１本受け取る。
佐藤：「んー…まいっか」指でくるくる回しておこう
祝：「んふふふ……ありがとうございます」

最後の1本は自分で持ったまま、祝はくるりと台に顔を向け、

祝：「細かい説明は抜きにして、この羅盤は風水的に良いポイントに建てられておりまして」
祝：「この中央、ここにたってこの算木を」と、手に持った棒を軽く振る
祝：「天に向かって投げます」
祝：「小生が最初に投げますから、皆さんもマネをして、その場で上にポイしてください」
祝：「投げられた棒が地面に落ちた時、その一つ一つの表か裏かで卦を立てます」

いわゆる投げ算木、というやつですね、と微笑む。

桐島：「ほいほい」
桜庭：「…」
七種：「……で、これでなにがわかるんだ？」
祝：「それはもちろん」と、桐島を横目に見て
祝：「ちゃんとみんなで幸せになる方法、ですよ」
桜庭：「そう…」
桐島：「うさんくせえ～」
雨宮：「…」言われた通りにしてみる
桜庭：桐島に目を向けたのをするどい目つきでねめつける
祝：ではその視線に対してにやりと笑おう。
桜庭：あ？という目線を返す
佐藤：「こりゃまた手間のかかりそうなことで」

七種：「……はなはだ面倒くさいが、一回だけなら付き合ってやろう」
七種：「いつ投げるんだ、っていうかもう投げていいか。そんで帰ってもいいか」
祝：「いえいえ。投げるのは一回だけ。小生が投げたら皆さんもすぐ一投を」
祝：「それで済みます……10秒もかかりませんとも」
ＧＭ：にへらり、と張り付いたような笑みを崩さずに
佐藤：「そっちの事じゃないんだけどね」
祝：「あら、これは失礼……では」
祝：「刻限もちょうど良い頃合い……投げましょうか、今」
ＧＭ：と、棒を下手に構えて
ＧＭ：それからすぐ、ポンと上に向かって投げた。
七種：「うわ、いきなりだな！」つられて投げる
雨宮：続けて投げてみる
桐島：ぽーい
桜庭：「おら！」力いっぱいぶん投げる
佐藤：後ろ向きに投げよう

彼らの手から離れたそれぞれの算木が、勝手な方向に飛んで行く。
手を伸ばしても届かないような高さまで飛び上がったそれが、夕日を遮る一瞬――
直後、前触れもなく生暖かい強風が羅盤の上に吹き込んだ。
同時に、痛いほどに大粒の雨が一行の顔を叩く。

桐島：「おわーっ！」

目も明けていられないような豪雨の中で、不意に耳へ届いたのは
何処までも響き続ける、澄んだ、しかし不可解な不協和音を含む、奇天烈な残響。
雨宮だけはこの音に聞き覚えがある。取材の最中に聞いた、あの妙な音だ！

桜庭：「何？雨の音じゃない…」
雨宮：「また雨…　…この音は…」

「んふ……羅盤がこの程度なら、呼べるのもこれくらいかしら」
ざあざあと降りしきる雨の奥から、いつの間にか姿が見えなくなった祝の声が聞こえる。
「やっぱり――本物の龍は嵐を呼――」
誰に話すわけでもないような彼女の声が遠ざかってゆく、と同時に
全員の前、雨のカーテンのすぐ向こうに、奇妙なシルエットが浮かび上がる。

ハカ：「ホロウルルルル……」
ショウズ：宙に浮かぶ巻貝のようなものに体を収めているもの、
ホロウ：ヘビの体に牛の頭を縫い付けたようなもの……
ハカ：そして空を泳ぐ魚のような、見たこともない不気味な生物たち。

雨宮：「……なんだいこりゃ」
桜庭：「RB？Aオーヴァード？それとも妖怪？」
佐藤：「とりあえずまあ良くないものな感じはするね」
桐島：「鈴音の言を信じるならこれで皆幸せになるらしいぜ？」
七種：「これでどう幸せになろうというんだ……動物園でも開けと？」
桐島：「ナイスジョーク」
桜庭：「切り身にしてあいつに毒見してもらおう。」

彼らに共通しているのは、その胴体が一様に鱗で覆われた細長いモノであること。
――そして、一行に対して明確な敵意をもって襲いかかろうとしていることだ！

ハカ：ひときわ大きな魚が身をくねらせると同時に、キミたちのすぐそばに氷の槍が突き刺さる
桜庭：「危な！やっぱジャームか！？」
桐島：「痛そ～」
雨宮：「やれやれ…こういう役回りは他の人の方が向いていると思うのだけどね」そう言いつつ両手をだらんとさせる
佐藤：「とりあえず一度仕留めてから解剖すべきだね？」
桐島：「攻撃来たら庇うからま、頑張ってくれ」
桜庭：「不良みるのもマチマチだし私の闘争心に付き合ってもらうか。」

▼戦闘

今回のエンゲージは以下の通り。
桐島、雨宮、桜庭、佐藤の４人は一塊のエンゲージに集まり、５メートル先にホロウＡＢの２体、10メートル先にハカ、ショウズＡ、Ｂの３体がそれぞれ１つ、合計３つのエンゲージが存在することになる。

第１ラウンドのセットアップは雨宮・桐島・桜庭がそれぞれ……

雨宮：《常勝の天才》！ 全員このラウンドの攻撃力＋28
桐島：Set:アクセル+タブレット+多重生成　視界：２人:行動値＋８：浸食値＋７
桐島：おー菫と未羽で
桜庭：怨念の呪石！

……となり、全員の攻撃力・行動値が大幅に上昇した状態でスタートを切る！
行動値24で一番手を取ったのは佐藤！

佐藤：んじゃあまあマイナーは特になしの
佐藤：【命ず】：コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖+彫像の声+風の渡し手（侵蝕値11）
佐藤：とりあえずこれで３体対象だからハカとショウズＡとホロウＡ１体ずつ対象かな

命中達成値は29でエネミーの積んでいるイベイジョンを楽々突破、そのダメージは、

佐藤：3d10＋9＋0＋28　ダメージ/100%未満/命ず　装甲値無視。命中した場合、シーン中対象の【行動値】-15。マイナーアクションで解除可能。
<BCDice：佐藤 菫>：DoubleCross：（3D10＋9＋0＋28）→ 12＋9＋0＋28 → 49
ショウズＡ：なそ
佐藤：ピュアノイマンいると１Ｔ目の火力がやっぱり違うぜ
桐島：やっぱ強いぜ…常勝の天才！

佐藤：「そこのお前とお前とお前…“大人しくしろ”」
ＧＭ：では放たれた“言葉”の衝撃で生き物たちの体がびしりと砕けてゆく！
ＧＭ：打ち砕かれた生き物たちはピクリとも動かない…

３体は抵抗のすべもなく一撃でダウン！　これに続いたのは雨宮！
【Ａランク：サポーター】の桐島によるサポートを受けつつ繰り出すのは《雨粒の矢》＋《マインドエンハンス》＋《虚構のナイフ》からなる……

雨宮：コンボ：《六月の雨》　敵すべてを攻撃

雨宮：11 dx9+6 命中
<BCDice：雨宮 未羽>：DoubleCross：（11 DX9+6）→ 10+8+6 → 24
ＧＭ：全員ヒット！
雨宮：3d 10 + 17 装甲ガード有効
<BCDice：雨宮 未羽>：DoubleCross：（3D 10 + 17 ）→ 20 + 17 → 37
ＧＭ：全滅！

雨宮：「まあ、見るからに本命ではあるまい。 ならば道を切り開くぐらいは」
雨宮：「私みたいなのでも、やっていい筈だ」そう言うと先ほどの土砂降りとは違う、一見しとしとした弱めの雨が魚のような何かに降り注ぐ
雨宮：だがそれを浴びた敵たちの肌からは血かあるいはそれに類似したものがあふれてくる。見れば、雨が細やかな氷の針となって突き立っているのだ
雨宮：「これは“奇跡の雨”……にはほど遠いんだろうね？父上」

桐島：「んな卑下するこたあねえと思うんだけどなあ……」
佐藤：「あれ痛いんだよねぇ」
桐島：「……撃たれたことあんの？」
佐藤：「ちょっと諸事情でね…」
桐島：「あー……ＯＫＯＫ何となく理解した。深入りはしない」
佐藤：「そうしてもらえると助かるよ。さてこちらの暴走少女ちゃんはどうしたものか…」

桜庭：「撃たせろ…撃たせろ…」
桐島：「まあまあ、本命まで取っとこうや」
桜庭：「衝動が収まらない…！」
桐島：「ステイステイ。いい子だから」
桜庭：「フーッ！フーッ！」
桐島：「しばらく放置してると戻るから、まあ見張っておけば問題はない」
桜庭：「血が騒ぐ…標的を…標的を…」
桐島：「うんうん今から探そうな。それまで我慢しような」
桜庭：「助けて…ジャームになりそう…」消え入りそうな理性で絞り出す
佐藤：「とりあえず深呼吸するといいよ」酸素バブル作っておこう
雨宮：「大丈夫大丈夫。 清羅は主役格なんだから、ここで理性が途切れる運命にはないよ」
桐島：「大丈夫だって、ちゃんと見守ってるから、な？」
桜庭：「スー…ハー…スー…ハー…」
桐島：「まあどうしても我慢ならんというなら俺を殴れ」
桜庭：「やだ…」
雨宮：「そういう趣味が？」
桐島：「ねーよ！応急処置だよ！俺だって痛いのは嫌だよ！」
桜庭：「ちょっと落ち着いてきた…」

雨宮：「ははは、啓一が愉快なリアクションしてくれたおかげかな」
桐島：「よーしよしよし。えらいぞ」
佐藤：「さてじゃあ改めて…この盤どうするかな？」

桜庭を落ち着かせている間に、氷針が突き刺さった生物からは、墨を溶いたような黒い水が滔々とあふれ出、その機能を停止してゆく……盤上に敵の影はない。

雨宮：「…と。 いやはや、まさしく水墨画の世界か」
桐島：「妙な敵だな……RBとも言い難い」
佐藤：「なにやら作り物の存在みたいだね」
桐島：「はぁ……聞き出さねえとか？いや、止めねえとか。探さねえとな」

GM：ではキミたちが息を整えている間に、ごぼりごぼりと黒い液体を噴き出していた生き物たちはゆっくりと溶けてゆく……後に残ったのは、何の変哲もない泥だけだ。

七種：「……とりあえず、風紀委員に報告した方がいい、のか？」
桐島：「ここに風紀委員が」
雨宮：「それは都合がいい、報告は任せよう」
桐島：「あー……俺らのエフェクト使用は緊急避難ってことで」
桜庭：「多分停学かな…」
雨宮：「今のは正当防衛だろう」
桜庭：「私が許可だしたことにするから…許されるでしょ…多分…」
桐島：「サンキュ」
七種：「まあハックマン氏なら悪くすることはあるまいよ」
桐島：「ええ～ほんとにござるか～？」ベアトリス苦手
七種：「大丈夫、ちょっと説教されるだけで済むだろう……たぶんな！」
佐藤：「まあ様子がおかしかったから何らかの介入もあるかもしれないしね？」
佐藤：「そのあたりは全容が見えてからでいいと思うよ」
桜庭：「あいつの言動ジャームっぽいんだよね…大丈夫かな…」
佐藤：「まあ報告だけは頼むよ」

桐島：「……なんでアイツ俺を標的にしたんだろ」
七種：「その辺も問いただしたいところだが……」
七種：「なんというか……余が手を出す前にすべてが終わったから、周囲を観察する余裕があったのだが」
七種：「祝の奴、あのみょうちくりんな生き物が出てくる前から、もうこの場にはいなかったぞ……」
桐島：「アレ出て来たのって占いしてすぐだよな？」
七種：「うむ。例の算木が地面に落ちるよりも前だ」
七種：「そういえば……算木のほうも見当たらないな」

桐島：「くせえなあ…」
桜庭：「風紀とギルティの気が強くなってきたよ。」
桐島：「しゃーなしだな……」

振りそぼっていたはずの雨もいつの間にか止み、辺りを照らす斜陽が、不穏な空気を運んでくる夕方のことだった……

▽シーン７：変異

ベアトリス：「災難だったな、お前たち」

……先ほどの騒動から少しして。

風紀委員会本部の空き教室にて、キミたちは委員長と向かい合っている。

雨宮：「やっほー、べっきー先輩」

ベアトリス：「や、やっほー…でいい、のか？」

桜庭：「きさくに挨拶する委員長…イイ…」小さな声で呟いた

桜庭：「委員長、どうしましょうかコレ…」

桐島：「困った困った」

ベアトリス：「ああ、そうだな……ともかく、だ」

ベアトリス：「羅盤だかなんだが知らないが、ああいった普通の野生動物に影響を及ぼすようなモノは危険だ」

ベアトリス：「まず手の空いている風紀委員で羅盤を解体、オカルト研究部にも事情聴取だな……」

ベアトリス：「それにしても、なかなか凶暴な龍たちだったようだな……」と口元に手をやる。

桐島：「問答無用で攻撃して来やがったからなあ」

ベアトリス：「報告を聞く限りでは、おそらく蒲牢（ホロウ）と虬蝦（いカ）、それから椒図（ショウズ）だろう」

ベアトリス：「学園島でもなかなか見ない、珍しい生き物だが……ふむ、となると」

ベアトリス：「あの羅盤が龍を呼び寄せる何かを……エフェクトか？　いやしかし……」と一人でぶつぶつつぶやく。

雨宮：「竜生九子（*14）？って事はレネゲイドビーイングなのかい、あれって」

桜庭：「何の何の何って言いました？」

桐島：「ＲＢなんだあれ」

ベアトリス：「うん？　いやレネゲイドビーイングではないだろう」

佐藤：「ふうん？」

桐島：「ちげえのお？」

ベアトリス：「ああ。珍しいとはいえ、〝ごく普通にその辺にも生息する生き物〟だからな」

なんでもないことのようにそう流す。

桐島：「あ？今なんて？」

ベアトリス：「どうした桐島……龍くらい見たことがあるだろ？」

桐島：「ないけど⁉」

雨宮：「うん？」

ベアトリス：「桐島……」急に憐れむような眼をして

ベアトリス：「……今年はな、風紀委員会が夏季合宿を主宰するんだが、いい機会だから参加してみたらどうだ？」
ベアトリス：「自然の中で暮らす生き物たちと触れ合う機会だぞ？　たまにはそういう生活も悪くない」
ベアトリス：「プログラムには野鳥観察なんかも入っていてな！　運が良ければ今日みたいな龍も見つけられるかもしれんぞ！　はっはっは！」
桐島：「なあ俺今キレていいよな!?」
桜庭：「そ、そうですよね！よく見ますもんね！」委員長が言うならそうなんだろうと思うことにした
桐島：「清羅……お前……」
桜庭：「無理筋だと思ってるけど……！委員長に恥をかかせたくないの……！分かって…」耳元で囁く
桐島：「……清羅がそういうなら」
佐藤：「露骨にまあ虚と実の垣根に弊害が出てきているね」
雨宮：「まあ落ち着き給え啓一」

雨宮：「それでべっきー、つかぬ事を聞くがね」
ベアトリス：「お、どうした雨宮」
雨宮：「そうだな…ふむ、では… 妖精を見た事は？」
ベアトリス：「急にファンタジックなことを言うな……無論、見たことはない」
雨宮：「なるほど？」
雨宮：「ご協力感謝するとも」
ベアトリス：「ふむ……なんだかしらんが、役に立てたなら幸いだ」
雨宮：「…ということらしいね」
桐島：「……なんつーかまあ、よーわからんことになってんな？」
雨宮：「少なくともべっきーが人外への経験豊富というワケではないらしいな」
佐藤：「こうなってくると露骨にディオゲネスクラブの関与が疑われるね」
桐島：「規模がなあ。……俺らが影響外なのは占いに関わってたからか？」
桜庭：「あー…これ、授業で習ったジャームの業に似てる気がする…」
桜庭：「あいつ…あいつ…まさか…」
七種：「何か心当たりがあるのか、桜庭氏」
桜庭：【虚実崩壊】（*15）で情況的に祝だと思うと話します

七種：「……なるほど。そういう状況か」
七種：「少なくとも、それを否定できる材料はないな……」と桜庭の話にうなずこう。
佐藤：「まあただ実際、下手人が本当に彼女かどうかまではわからないんだよねぇ…龍らしきＲＢの存在も目撃したし、ね？」
七種：「いたなあ、山の中に……」うんうんと首を振る。
桜庭：「でも私達にも影響ないのおかしいなぁ…」
桐島：「それだよなあ…」
桜庭：「自分は前座とか言ってたし別に黒幕はいるかも。」

桐島：「十中八九鈴音を諭したやつなんだろうが…」
佐藤：「まあとりあえず調査に入ろうじゃないか」
佐藤：「考えるのは結果が出そろってからでいいさ」
桜庭：「ＦＨとかだったら撃ち抜いてもいいよね…」
桐島：「やったれやったれ」

ベアトリス：「……よし、報告書はこんなところでいいだろう」
ベアトリス：「お前たち、時間をかけてすまなかったな。もう帰っていいぞ」
ＧＭ：君たちの相談をよそに、書類を書き進めていたベアトリスがそう言うと、ペンを置く。

桐島：「ういーす」
雨宮：「ではまたね」
桜庭：「はーい！これ以上変なことになる前に解決頑張りまーす！」出ていく
佐藤：「じゃあまあ、これ以上悪化しないようにね」
七種：「まったく、妙なことになったものだなあ……」出ていく。
桐島：「動くとしますかね…」
七種：「うむ、寮の門限までは時間がある」
七種：「カフェテリアに行こう。あそこならまだ生徒たちが残っているし、報収集の場にはよかろう」
雨宮：「いいとも」
桜庭：「風紀委員だから門限無視してもいいかな…本気だしちゃお。」

消えた祝、歪んだ認識、奇妙な生き物たち……
この不可解な状況を打破すべく、一行は情報収集を開始する。
……が、その前に下準備として、シーン移行前に購入などを済ませることに。
まず、桐島が再びＵＧＮボディアーマーの購入に成功し、雨宮へ譲渡。
佐藤も同じくボディアーマーを購入、桐島に渡し、これでボディアーマーは３着に。
そして桜庭はこのタイミングでロイスを取得したのだが……。

桜庭：ロイス　桐島くん　友情／憐憫○
桐島：憐憫されてる…
桜庭：わけわかんない女に付きまとわれてるから…
桐島：たしかに…！
祝：桐島君をストーキングとか許せませんね…
桐島：つ鏡
桜庭：いまなら罪悪感から自首しても間に合うぞ

（＊14）

中国の神話・民話における、龍が生んだ９匹の生物のこと。９種類いることは共通しているが、文献によってその内容は異なる。

ＧＭ：竜生九子って即バレててリアル知識にビビるぜ！

雨宮：人はググればノイマンになれるのだ

（*15）

Ｅロイスのひとつ。［衝動.妄想］に属し、自身の妄想が実現化して世界を大きく変容させる効果を持つ。何が起きるかはＧＭの裁量に任せられる部分が多いため、いろいろ便利。

▽シーン８：情報

カフェテリアに移動した一行は、さっそく情報収集を開始する。
一番手は桐島、このところ島を騒がせていた「雨について」について調べ上げ、その詳細を明かす。

・雨について<情報:噂話、ＵＧＮ>８

「幸運を呼ぶ通り雨」は、オーヴァードの意志に反して
《リトルハッピネス》（*16）を一時的に発現・強制発動させ続ける効果がある。
一回一回の侵蝕率上昇はそう怖いものではないが、
雨が降り続ける限り本人がその発動を止めることは難しい。
常にエフェクトを使用するような状況が続けば、
いずれは暴走する者も出てくるだろう。

佐藤：邪悪だわこれ
雨宮：オルクスじゃないのか…
桜庭：うわぁ…
桐島：「やべー……いやまじでヤベー……テロだわ」
桐島：「いやでも俺は一生幸せにならん言われたし対象外なんじゃね？」
桐島：「不幸もたまには役に立つ」
七種：「逞しいくらいに前向きだな……」
佐藤：「解決にあたって支障がないのは助かるね」
桐島：「んだんだ」

続いては佐藤が、山中で見かけた「龍について」の調査を順調に成功。

・龍について<情報:噂話>５、９

５：山奥の清流やよく晴れた海の上で時折見かけることができる生き物。
幸運を呼ぶ龍は恵みの雨をもたらすが、
厄災を運ぶ龍は荒天とともに現れるとされる。
……だが、昨日まで非現実の存在だった龍が、
何故実在の生物として認識されているのかは不明。

９：過去のジャーム事件などから推測するに、
非実在の生き物が現れ、現実のものとして振る舞う様子は
Ｅロイス「虚実崩壊」による影響と考えられる。

佐藤：「ま、案の定といったところだね」
七種：「これでウラが取れたわけだ」
桐島：「参ったなあ」
桜庭：「あー…そっか…そっかぁ…」

三番手は雨宮。「祝の過去について」学園通の友人とのコネを駆使し、これも調査を完了させる。

・祝の過去＜情報：アカデミア、噂話＞ 7

かつてジャーム絡みの事件に巻き込まれた祝は
「龍が現れ、怖い人をやっつけてくれた後に、能力を授けてくれた」ことで覚醒した。
だが現場の状況や両親への聞き取りを含めたＵＧＮによる追加調査によれば、
「龍」は彼女がエフェクトによって作り出した可能性が高い。
一方で、入学時のテストではそれほどの出力を観測できなかったことから、
その能力には一部ロックがかけられている可能性が指摘されている。

雨宮：「……ふむ」
桜庭：「リーチがかかったか…」
桐島：「よくあるやつではあるな」
雨宮：「秘めたる力、って奴だね」
桐島：「――を制御するためのアカデミアなんだけどなあ」
雨宮：「あるいは…ロックは、制御できないがゆえのものかもしれないが」
佐藤：「引き金は軽く弾いただけで飛んでいくものだからね」
桜庭：「抑圧されたくないからって授業サボるのも多いんだよね…」
桐島：「もうちっと穏やかになれんものかね…」
雨宮：「訓練に取り掛かるどころのレベルではないという話もある。それで尚Ａランクというのもすさまじい話だが」
七種：「いずれにせよ……龍の大本は奴であると考えて間違いはなさそうだな」

ラストは桜庭が、居なくなってしまった「祝の行方」を
桐島のサポートと共に調べ上げ、難なくその居所を突き止める。

・祝の行方＜情報：噂話、アカデミア＞ 6

教室はもちろん、オカ研の部室や寮の私室にも姿を見せていないが、
海水浴場の近く、灯台のある当たりで彼女を見かけた生徒がいるという。
どうやら、何人かの仮面を付けた人間と一緒にいたらしい。

桜庭：「仮面ってアレか…ディオゲネスクラブとかいう…」
桜庭：「マスターが名前を出してたような…」さっぱり思い出せない
桐島：「黒確定」

佐藤：「間接だけじゃなくて直接の接触も判明したね」
桜庭：「いっぱい撃てるな…よし！」
桐島：「灯台か、よし」
雨宮：「うんうん。彼らには悪いがまあこういう運命というものだからね」
桐島：「クラブの連中も捕まえられたらいいんだけどな」
佐藤：「そこまで行けるかはどうだろうねぇ…あいつら隠れるのは上手だから」
桐島：「それなんだよなあ……いっつも捕まえるのは諭された奴ばっか」
七種：「尻尾をつかませないというのは一番厄介だな……」
桜庭：「逃げられたらその分闘り合えるから泣くまで付きあってやる…！」
雨宮：「頑張ってくれたまえ、サポートぐらいはさせてもらうとも」
七種：「……いつか悪事を働くことになったとしても、桜庭氏にだけは捕まりたくないな」

七種：「さて……これで情報は出そろった、と考えてよかろう」
七種：「それで、これからどうするかだが……今から灯台へ向かうか？」
七種：「今日はもう暗い、門限も近いし……明日また探しに行くというのも手ではある」
桐島：「まず行ってみようぜ。いたらそれでいいし、いなくても何か手掛かりあんだろ」
七種：「……そうだな。行くだけならそう時間もかかるまい」
佐藤：「まあ、行くというならついていくけど？」
桜庭：「ジャーム化しないうちに捕まえたいから行くよ。門限は私が誤魔化す。」
七種：「頼もしい言葉だ……では、ひとまず夜になる前に灯台へ行こう！」
雨宮：「いいとも」

（*16）
一般エフェクトのひとつ。購入判定のダイスを増加させる効果を持つ。

▽シーン９：灯台

夕焼けの茜色が西の空を染め上げる頃。高等部校舎から２ kmと少し。
キミたちが到着した海水浴場近くの灯台は、ひっそりとたたずんでいる。
あたりに人の気配はない……灯台のふもとにいる１ 人を除けば、だが。

「……おやあ」
「ふうん、やっぱり来たんだ」

桐島：「そりゃあ来るだろ。逮捕だ逮捕。現行犯逮捕」
桜庭：「風紀委員室で事情聴取の後に教員とＵＧＮに差し出すので覚悟して下さいね。」
ＧＭ：「怖いことを言わないでほしいなあ……」
ＧＭ：「ボクはただ、友達が欲しいだけなんだからさ」

ゆっくりと振り向いたその人影には……顔がなかった。
より正確に言えば、顔に当たる部分に形容しがたい複雑な仮面がつけられ
そしてその体は、輪郭が奇妙に揺らぎ続けている。

この奇妙な人物に対し難易度６ の<知覚>判定に成功した桐島たちは、
目の前の人影が人間ではなく、エフェクトによって作られた従者(*17)である事に気付く。
より正確には、すさまじい実力のブラム＝ストーカーによって作成されたものである、と見当
がつくだろう。

佐藤：「随分と奇怪な姿じゃないか」
桜庭：「正気を失ってるならまだ救いがある。」
佐藤：「被造物で顔のない存在…どこかで聞いた話だね？」
ＧＭ：「ふぅーん、だいぶ有名になっちゃったのかな」
桐島：「本体出せ本体」
雨宮：「本体…従者か」
ＧＭ：「イヤだよ。だって捕まえるんでしょう？」
桜庭：「祝さんじゃないのかそれともプロフを偽ってたの？何そのエフェクト？」
ＧＭ：「はふり……？」

ＧＭ：はふり、はふり、と何度か確認するように呟くと
ＧＭ：「ああ、あの遺跡を見つけるために使ってるヒト！」
桐島：「遺跡だあ？」
ＧＭ：「そうだよ……あれ、言ってよかったのかな、これ」
ＧＭ：まあいいや、と言い捨てる声からは、感情を読み取ることができない。

桜庭：「仮面の下を見せろ。誰だ？」
ＧＭ：「仮面の下なんて〝ない〟よ。ボクはこれが」
ＧＭ：とんとん、と顔の仮面をつつく
ＧＭ：「ボクそのものなんだから」
雨宮：「仮面…のレネゲイドビーイング…？」
桐島：「キモ…」
佐藤：「まあキミが誰かなんてのはどうでもいい話だからさ」
桜庭：「割ったら死ぬのかな？試し撃ちしてもいい？」
桐島：「もうちょい話聞いてからな」

ＧＭ：「そうだね、誰が誰かなんて、どうでもいい」
ＧＭ：「ボクはただ〝友達〟が増えればそれでいいんだ。はふり…？　さんも、友達になってくれると嬉しいんだけどね……」
桐島：「ぜってー普通の意味の友達じゃねえわ…」
佐藤：「まあその友達にろくでもないことはしてるだろうね」
桜庭：「祝さんが幸運を吸う？とか変な龍に私たちを襲わせたのはあなたのせい？」
ＧＭ：「……そうだね、たしかに〝ボク〟のせいだと思うよ」
ＧＭ：「はふり……さんは、もともとヘンな人だったから、友達にするつもりはなかったんだけどね」
ＧＭ：「だけどね、〝ボク〟の仲間が面白いことを考えたんだよ」

ＧＭ：「ずぅっと前から、〝ボク〟は遺跡を探してきた」
ＧＭ：「だけど、ちっとも見つかりやしない……これはどうも、普通の探し方じゃあ見つからないんじゃないかな」
ＧＭ：「だからね、地道に島中を歩いて探すんじゃあなくって……」
ＧＭ：「『島全体にエフェクトをかけてみる』んだって」と、抑揚のない声でそう言った。
ＧＭ：「遺跡はレネゲイドの力を増す……んだったか、減らしちゃうんだったかな？」
ＧＭ：「とにかく、レネゲイドの影響を強く受けてるはず、なんだって」
ＧＭ：「だから、島中にエフェクトをバラ巻いてから、反応が強かった場所を調べてみたら」
ＧＭ：「そこが遺跡に関係してる場所なんじゃないかなぁ……って、そういう作戦」

桐島：「ふーん……」
桐島：「それがあの雨か…」
ＧＭ：「うん。あたまイイね、お兄ちゃん」
桜庭：「遺跡見つけて何するの？というかジャーム増えるからすぐにやめて。」
佐藤：「まあ一理はあるしそういうのも一考はしたけれど…鉱山を丸ごと爆破するようなものなんだよねぇ」
桐島：「……鈴音が俺を狙った理由がまだよくわからねえっていうか更によく分からなくなったっていうか」

ＧＭ：では、各々の反応のうち、桜庭さんの言葉にだけ強く反応すると
ＧＭ：「遺跡が見つかるとね……友達が増えるんだよ」
桐島：「友達〝ジャーム〟ね、理解した」
ＧＭ：ジャーム、という言葉には反応せず、ゆらゆらと人影は揺れ続ける。
ＧＭ：「友達が増えるとうれしいよね……本当のことを言うと、雨は嫌いなんだけどさ」
ＧＭ：「だから、今日もこうして準備をしに来たってわけ」
ＧＭ：そういうと、人影は小さな棒を灯台のたもとに置く。

桐島：「一つ忠告をしてやるとだな」
ＧＭ：「忠告？」
桐島：「素顔を隠してる覆面野郎に友達なんかできるわけねえし、遺跡にあるのがモノだか何だか知らねえがんなもんに頼る奴にも友達なんかできねえぞ」
桐島：「二つだったわ、すまん」
ＧＭ：「……ふふ」
ＧＭ：「お兄ちゃん、面白いね」
桐島：「お前義務教育通ってないだろ。これだからＦＨは……ちゃんと道徳の授業出ろ？」
桜庭：これだからＦＨという発言にちょっとビクッとする(*18)

ＧＭ：「えぇ～……だって面倒だもの、授業に出るの……」
桐島：「俺は出たから健やかに育ったし友達も多い」
桐島：「まあこんなオーヴァードだらけの島で？人間社会のまともな道徳が学べるかって言うと？俺も難しいかなって思う所はあるからお前には同情するぜ」
桐島：「でもめんどくせえで出ない奴が友達作れないよーって泣き言言うのはお前、ただの馬鹿」(*19)
桐島：「いいか？何ならアカデミアの授業サボりがちでも俺くらいの人徳があると友達は多い」
桐島：「その人徳はどこで培われたかっつうと道徳なわけよ、分かるか？義務教育はちゃんと終えろ」
桜庭：「厄介なストーカーまで付くもんね桐島くん。」
桐島：「……そう言われると人徳があるのも考え物だな」
雨宮：啓一の発言をニコニコしながら聞いてます

「……ふふ、ふ、ふふふ」
従者が笑うたびに、今までぼんやりとだが保たれていた輪郭が、どんどんとぼやけてゆく。

ＧＭ：「そっか、そういう考え方もあるよね……授業に出て、友達が増える、か……！」
ＧＭ：「うん、面白いよ、お兄ちゃん……！」
ＧＭ：「ねえ、今の言葉、〝本当のぼく〟にあった時にも、言ってほしいな……」

……ぼやけ始めた輪郭の淵から、どす黒い液体が流れ始める

それと同時に、従者の姿が縮んでゆくのがわかるだろう。

桐島：「じゃあ俺の部屋来いよ」（*20）
桐島：「セントジョージにあっから」
ＧＭ：「そっかぁ、セントジョージ寮かぁ……」
ＧＭ：「楽しそうだよね、あそこは……うん」
ＧＭ：「今度行ってみるよ……また別の"ボク"になると思うけど」
ＧＭ：「約束する……絶対に行くから……」
桐島：「茶菓子くらいは持ってこいよ」
桜庭：（そうやってすぐアドレス教えちゃうとストーカー増えるんじゃないかな）

最後の言葉は、ほとんど聞き取れないほどに小さく、か細く、
その言葉の残響が消えるよりも早く、従者は夕闇の中に溶けていった……
あとにはもう、なにもない。

雨宮：「いやあ」
雨宮：「啓一カッコいいね。茶化してるわけではないよ、念のため」
佐藤：「自分から面倒を抱え込む性質だねキミは」
桜庭：「桐島くん、なんだか哀れみを覚えてきたよ。」もとから
桐島：「俺ただ常識を伝えただけじゃねえ？」
桐島：「だって考えてもみろよ！義務教育だぜ義務教育！義務なんだからちゃんと履修しないといけないだろ！」
桐島：「ちょーっと変な力あるからってオーヴァードは義務を放棄するのに慣れすぎてんだよ。俺は真っ当！」
佐藤：「だといいね」
雨宮：「そうだねえ…」
七種：「その義務すら果たせない環境というのがザラにあるだけの話さね」
桜庭：「義務があるのは親でその親がアレな私みたいな…おっと…まあ、そういうこと。」
雨宮：「私も義務放棄してみようかな？」
桐島：「何でそんな反応なわけえ……？」
桐島：「やめろやめろこれ以上俺の周囲から常識を切り取るな」
雨宮：「なんてね、冗談だよ。それに似合わない」
桐島：「全く……これからの世界の行く末を憂うわ」
桜庭：「桐島くん、私達にもっと常識を教えてね。」信頼のまなざしを向ける
桐島：「清羅は十分常識じゃん、風紀委員だし。むしろ俺の方が迷惑かけてる側だもんなー」
桜庭：（私の常識人エミュは完璧なみたいね）

七種：「お二人さん、仲良きことは美しきかな……だがね」
七種：「ひとまず、今はもうここにいる意味もないだろう」
七種：「……あの不気味なヘンテコ従者のことは気になるが、いったん帰ろうではないか」

桐島：「それもそうだな。寮長にどやされる前に帰るとしようか」
佐藤：「まあ、目的も分かったことだしいいんじゃない」
桜庭：「風紀委員に付き合ってたって言えば多少は大丈夫！安心して！」
七種：「ありがたいような、風紀委員がそれで大丈夫なのか不安なような……」

夕日は既に地平線の彼方に、半分以上沈みかけている。
今から帰れば、セントジョージ寮の夕食にギリギリ間に合うだろう……。

（＊17）
ブラム＝ストーカーによって生み出される使い魔の総称。外見はさまざまだが、ほとんどは意思のない人形のような挙動を取るものの、一部の能力者は自意識を持つかのように動く従者を生み出すことがあるという。

（＊18）
ＧＭ：唐突なＦＨディスでダメだった
佐藤：刺さる相手が…多い…！
桐島：ＦＨチルドレンに義務教育通えてるイメージがない！
パーソナリティーズに書いてある通り、ＰＣはほぼ全員が特異な家庭環境で育ち、更にその大半がＦＨ関係者である。

（＊19）
佐藤：「知識は兎も角道徳はまあまともじゃないね…」
雨宮：「授業に出ろって言えるのすごいなあ」
桜庭：「友達なら学校でも作れると思うけど…」
桜庭：「ほとんど内申点のために出てるなぁ…」

（＊20）
桐島：もしやこういうムーヴを各地でしてストーカーが増える…？
ＧＭ：これが人徳かぁ…
佐藤：なるほどな…
桜庭：人徳（迂闊さ）
桐島：学校出ろって当然の事言っただけでストーカー生えるの酷い環境だな！
ＧＭ：今まで学校へ行けなんて言うような奴がいない環境にいた奴らだからな…
雨宮：それを言える教師がどれだけ少ないことか
桜庭：そうＦＨは想像を絶する酷い環境なのです
ＧＭ：ほんとＦＨチルドレンは地獄だぜ
桐島：これでまじで推定クラブの幹部以上が来ちゃった❤したらどうしよう
佐藤：お友達になろうよ！

ＧＭ：友達になるしかないな！
桐島：けいいちは戦闘能力の一切ないかよわいオーヴァードなんですよ！
桜庭：次のシナリオの出だし決まったな…
雨宮：ケイイチ　マイ　フレンド
佐藤：よしＯＰで啓一の部屋に突入させるか…
桐島：くっ…俺は常識のない奴には屈さないぞ…！これからも道徳の大切さを伝えてやる…！

◆クライマックスフェイズ

▽シーン10：逆風

翌朝。今日も日射を遮るモノは欠片すら見当たらない、恨めしいほどの快晴。
島の全域で降水確率は０％であるとの予報にもかかわらず、生徒は口々に
「Ｎ組の芦屋が昨日、例の通り雨に降られてから10連引いたら星３引いたらしいぜ！」
「うちの寮だとキリルが自販機のアタリを４回連続で引いてたな……」
「こっちだとナジャの飼ってる三毛猫がオスの赤ちゃんを産んだって！」
……と、朝の教室で小さな幸運の報告を交し合っている。

桜庭：「すごいね…雨の影響…」
佐藤：「実にまずい状況と言えるね？」
桐島：「俺は朝から石に躓いたりしたんだけどな」
佐藤：「順当に幸運が出ていることが不幸なことかつまずい状況、ということさ」

土浦：「やーすごいね、通り雨効果！　みんなも何かあったりした？」
桐島：「俺は発生源から直々に不幸になるって言われてっから」
雨宮：「幸運ね…強いて言えば本日も快晴である事かな」
桜庭：「札束拾った。」（*21）
土浦：「マジで!?」
桐島：「すげー」
桜庭：「怖かったから捨てた。」
桐島：「正しい」
雨宮：「確かに」
桜庭：「というかアイツになにかされるとか癪。」
佐藤：「余計な縁を抱え込まないのは大事だね」
土浦：「な…なんかよくわかんないけど、いろいろあったんだね……」
土浦：「いやー実はね、私も雨に降られたはずなんだけど、いまだにそれっぽいことがなくて……ん？」

……気が付くと、何やら教室の中が騒がしい。
何人もの生徒が窓際に集まり、しきりに何かを指さしている。

雨宮：「実は雨に濡れた姿を気になる男子に…ん？」
桐島：「アイドルでも来たのか」
桜庭：「お？だったらサインもらお！」
土浦：「そうだったら一大事だなあ！　ねーなんかあったの？」

ＧＭ：「海！　海水浴場のほうにでっかい嵐が来てるって！」
ＧＭ：「ここからも見えるよ……これ、今日早退になるレベルじゃない？」
佐藤：「ほう？」
桐島：「嵐ィ？」
桜庭：「うわぁ…今日、傘もってなーい！」
雨宮：「ちょっとハヌマーン男子ー、嵐起こすのやめなさいよー」
ＧＭ：「そんな規模でエフェクト使ったら風紀委員会にブチ殺されるわ!!」

彼らの目線の先、学校の西に面する海上には、確かに巨大な灰色の雲が沸き上がっている。
時折、光が教室を薄く照らしたかと思うと、数秒遅れで遠雷の音が響く。
「ウワーッやべえ！」「テンション上がってきた！」「折り畳み傘で帰れるかなこれ……」

桐島：「わーお」
雨宮：「…雨、か…」

吹き付ける風は教室の窓を揺らすほどに強くなり、大粒の雨が校庭を濡らし始めている。
本格的な嵐の到来に、生徒たちがわいわいと騒ぎ始めたその時、
湿った衝突音。校庭の中央へ叩きつけられるようにして、黒い塊が現れた。

桐島：「なんだありゃ」
桜庭：「窓割れるとモルフェウス駆り出されるんだよなぁ…ん？」

魔龙：「ウ……ウウ……」

彼らの前に姿を現したのは……見覚えのある、蜷局を巻いた獣の姿だ。

七種：「あれは……山の中で見た龍ではないか！？」
桐島：「昨日のより強そうだな……見たことあんの七楽」
七種：「あ、ああ……少し前にあれを山で……しかし、何故今ここに!?」
桐島：「昨日の奴は雨と同時に襲って来たし今日もそういうことじゃねえの？」
桜庭：「そのときは襲って来なかったの？七種くん？」
七種：「雨と共に……あ、いや、その時はすぐにいなくなってしまったのだが」
佐藤：「はてさて…」顔は見える？
七種：「ん……こっちを見ている……のか？」

脱力した様子の龍は、耐えがたい程に重いモノを持ち上げるように、ゆっくりと頭部を教室への方へ向ける。

「――――見ないで……――――」

その顔は、祝のそれだった。

桐島：「わーお」
桜庭：「は？」間の抜けた声で
雨宮：「……おおう」
七種：「あれは確かに祝氏の顔だったぞ……一体何が起こっている!?」
桐島：「巻き込まれたんだろ。……どうにかしないとな」

皆がそれぞれに反応を示している最中、何時の間にか、龍の傍らに人影が1つ。
嵐の中に居ながら、制服が濡れている様子もない〝それ〟は、
口の端に薄く笑顔を乗せたまま――

龍之梦（ドラゴンズドリーム）：『お・い・で』

――祝と同じ顔をした、けれども違う表情（カオ）の〝それ〟は、わざとらしくゆっくりとそう口を動かし、スカートのポケットから算木を取り出す。
ドス黒く変色した算木が宙に投げられた瞬間、市街地から飛んできたらしい「抹茶マカロン　新発売」と書かれたのぼり旗が窓に張り付く。
数秒の後、べろりと剥がれたその向こうには、既に誰の姿もなかった。

桜庭：「抹茶マカロン with 抹茶…あのときの私はバカだった…」
佐藤：「まあ、少し考慮はしていたが…やはりそういうことかね？」
桐島：「早退するわーどうせ休みだしな」
雨宮：「おやおや風紀が乱れているね。　仕方ないから風紀が乱れないようについていってあげよう」
桜庭：「雨宮さんそれ私の仕事！というわけでついてこ！」
桐島：「不良だな～」
雨宮：「ま、手伝いぐらいは構わないだろう？」
桜庭：「人手不足だからね！むしろありがたいよ！」
桐島：「情けない話俺に解決するための力はないからな。ま、頼むわ」
佐藤：「ではまあ物見遊山に出かけようかね」
七種：「ほう……なら余のアルが火を噴くぞ……」
桐島：「嵐だぞ大丈夫か……そういや耐水性あるっってたな」

七種：「フッ、任せておくがよい！　こういう時のための変形形態が……！」

……やにわに騒がしくなり始めた教室に、整然とした足音が近づいてくる。

「失礼する！　桜庭はいるか！」

何人かの風紀委員を引き連れ、慌ただしく教室に入ってきたのはベアトリスだ。

桜庭：「はい！何でしょう！」

桜庭：犬のように駆け寄る

雨宮：「あ、べっきー」

桐島：「早退を嗅ぎ付けて来たってのか…！」

ベアトリス：「ほう、早退する気だったのか、そうだったのか、これはいいことを聞いたなあ？」

ベアトリス：「……よし、桐島に雨宮、佐藤もいるな」

ベアトリス：「手短にいこう。あの嵐を見たな？　人手が欲しい。お前たちに協力を頼みたい」

桐島：「うわー…めずらし…」

ベアトリス：「それくらい緊急事態ということだ。早速だがまず校内の……」

と、口を開きかけたところに、またも足音と共に風紀委員会の一人が飛び込んでくる。

クリス：「委員長！　たった今、学園中央駅から全線運航停止の報告が！」

クリス：「嵐の影響で電線が切断……線路上にも多数の障害物が飛来、現時点では復旧の見通しも立たないと……！」

佐藤：「本当に色々大変みたいだね」

桐島：「大事になってんなあ…」

ベアトリス：「ああ……想像以上にマズいな。あの台風は１時間もせず上陸するぞ」

佐藤：「まあ、となると一番楽なのは根本をどうにかすることだろうねえ」

ベアトリス：「……心当たりがあるのか？」

桐島：「あるある。もうバリバリよ」

桜庭：「ああ、調査報告まだだったから委員長知らないんだ…」

桐島：「昨日の今日だしな」

ベアトリス：「その口ぶりから察するに……祝関連と考えていいのか」

ＧＭ：と桜庭を睨む。怒っているわけではなく、真剣になると迫力が増すタイプの顔付ゆえだ。

桜庭：「本人よりその裏に何かって感じですけど…あいつが原因ですね。」あまり見ない顔にゾクゾクしながら答える

ベアトリス：「居場所はわかるか？」と詰め寄ろう。

桜庭：「灯台が最後の目撃証言です。」

ベアトリス：「そうか……」

ＧＭ：眉間に皺を寄せたまま、しばらく黙り込む。

クリス：「委員長……人数の関係上、これ以上の風紀委員会からの派遣は……」

ベアトリス：「ああ……ならば緊急措置だ」

ＧＭ：ふっと表情を緩め、キミたちの方へ向き直る。
ベアトリス：「風紀委員長、ベアトリス・ハックマンの権限を以って、エフェクトの使用を許可する」
ベアトリス：「お前たち……任せてもいいか？」

桐島：「友達に会いに行く程度風紀委員に命じられる必要ねえだろ？行ってくる」
佐藤：「まあ別にその辺拘ってはないけれど大義名分があるなら堂々とやれるね」
雨宮：「謹んで手伝わせてもらいますとも」
桜庭：「皆頼もしいよ…終わったら何か奢らせて！」

ベアトリス：「……ありがとう」
ＧＭ：暫時微笑むと、再び委員長の顔になる。
ベアトリス：「では、お前たちにはその原因となる場所まで向かってもらおう」
ベアトリス：「先の報告通り、路面電車は止まっているから……危険だが徒歩で向かうことに……」

「そういうことなら任せておけ！」
と、名乗りを上げた七種が、鼻を鳴らして自らの〝脚〟を叩く。

七種：「余の<アルキュオネウス>七変化が一つ、その名も鉄輪形態！」
七種：「装甲に優れる多脚戦車の特徴はそのままに、走破性と移動速度を向上させた輸送形態なれば！」（*22）
七種：「雨にも負けぬ！　風にも負けぬ！　如何なる悪路・飛来物とてモノの数ではない！　たぶん！」
七種：「まあその分燃費と快適性は犠牲になったが……島を半周するくらいなら訳はないぞ！　酔うけど！」
七種：ドヤ顔。

桐島：「ダメじゃね？」
桜庭：「そんな機能あったんだ…」素直に感心する
雨宮：「ハハハハ。　いいじゃないかトンデモ兵器、そうでなくてはね」
ベアトリス：「……使えるのならこの際なんでもいい」と呆れつつ
ベアトリス：「七種、貴様のそれは何人まで運べる？」
七種：「嵐の中を走ることを考えれば、運転手を除いて１度に４名が限界だな」
ベアトリス：「わかった。では……」

ベアトリス：「桐島、桜庭、雨宮、佐藤」
ベアトリス：「先での判断はお前たちに一任する。私は……」

ＧＭ：瞬間、教室が――廊下が――校舎が、凛とした空気に包みこまれてゆくのがわかる。

ベアトリス：「私の〝領域〟の安全を確保する……任せたぞ」

（*21）

雨宮：サタスペの話？

ＧＭ：アカデミアはオオサカ支部の管轄だったの…？

佐藤：コワー

雨宮：サタスペだとごく普通に札束拾いそうで困る

ＧＭ：拾う（襲撃しながら）もあるぞ！

（*22）

ＧＭ：ルール上乗り物に同乗できる人数はいくら多くても問題ないからな…

ＧＭ：100人乗せて全力移動しても移動距離が短くなったりはしない

桜庭：距離100ｍの敵とか出たら乗せてもらうね…

ＧＭ：一生出る気がしねえ！

雨宮：ミサイルかな？

桜庭：タワーディフェンス型の戦闘とかで増援がどうとかでこう…

佐藤：公式シナリオにミサイル出すＦＥＡＲにはまいったね

ＧＭ：ミサイル倒すシナリオはあれと半熟英雄しか知らない

▽シーン11：颱風

七種：「これは……想像以上だな」

教室を出て10分と少し。

強烈な横揺れ、狭苦しい車内、逃れられない湿気と熱気、エトセトラ。

最悪な諸々を兼ね備えた「鉄輪」から解放されたキミたちの目の前に広がっていたのは。

――灯台のふもとへ吹き付ける風が、樹木や電線、瓦礫などを〝組み上げて〟奇矯な舞台を作り終えた光景だった。

七種：「……大風水羅盤の拡大版か、これは」

桐島：「カラスの巣みてえ」

桜庭：「面倒な改築するなぁ…」

佐藤：「あんまり美しいとは思えないね」

雨宮：「ゴーレムかい？　構造力学上はかなりムチャクチャだね、構築がエフェクトに頼り切りなのは数理部としては少し残念ではあるね」

七種：「雨宮氏の着眼点はすごいな……」

桐島：「ノイマンらしい」

桜庭：「詳しくないノイマンもいるよ…雨宮さんは博識だね。」

雨宮：「私の事は気にしないでくれよ、それよりもアレだ」

七種：「うむ……いるな、中央に」

桐島：「十分な広さあるし、今度はステージに立ってやるか」

龙之梦：「んふふ……ようこそ、大風水羅盤――改め〝龍津花園（りゅうしん）〟へ」

羅盤の中心、不可解な舞台の上に、彼女が立っている。

龙之梦：「ステキな光景でしょう？　いつかこんなコトができる日を、〝わたし〟ずっと夢見てたの」

桐島：「偶には嵐の日も悪くはねえがな」

桜庭：「君、キャラ違くない？」

雨宮：「祝…ではないのかい」

桐島：「俺の部屋に来た時はあんなだったからあん時にはもう入れ替わってたのか」

龙之梦：キミたちの問いかけに、にんまりと笑って

龙之梦：「〝わたしが祝 鈴音なの〟。今までのあの子はもうおしまい」

龙之梦：「だってそうでしょう？　いつまでもオカルトに頼って、好きな男の子にもバカみたいな

迫り方しかできない……」
龙之梦：「あんなの、わたしじゃないわ」
佐藤：「自分で出した結論でそれなら別にバカにしないんだけどねぇ…原因が原因だからね」
桐島：「やらかした過去を失くそうとしても俺はばっちり覚えてるぞ」
雨宮：「つまり君は祝の偽物ということかい？」
桜庭：「…」ちょっと渋い顔
龙之梦：「もう、だからぁ……わたしこそがホンモノなんだって」
龙之梦：「その証拠に、ほら！」

大きく手を広げると、背後に広がる海――そしてそこに聳え立つ大嵐を指す。

龙之梦：「こんなにも強大な龍を呼べたの！　これもわたしの作った羅盤のおかげよ！」
龙之梦：「こんなこと、あの子にはできっこないもの！」

桐島：「人が何者かが決まるのは出来ることの多さでも少なさでもねえから」
桐島：「何者になるか、なら正しいけどな」
桜庭：「そんなもので何をするの？」
雨宮：「なんだいそりゃあ」
雨宮：「オリジナルよりも力量が上回ったから、精神的に優位だから、何にも頼らないから本物を主張するって事でいいのかい？」

龙之梦：「ああもう、うるさいなあ……」
龙之梦：「わたしはわたし。自分がそれをわかっていれば、それで十分だわ」
佐藤：「まあそれでいいんじゃないかい？私も君自身には用がないわけだし」
龙之梦：「へぇ……ま、わたしも佐藤さんたちには興味ないし」
龙之梦：と、桐島を見る。

龙之梦：「龍はね、恵みの雨と共に幸運を呼び込む神獣なの、知ってた？」
桐島：「ここじゃあ不良で通ってるもんで」
龙之梦：「じゃあ教えてあげる。嵐の中から現れる龍は、福の象徴でもあるのよ」
龙之梦：「こんなに大きな嵐の龍なら、絶対みんなを幸せにできる！　そうよ！　あの日から！」
龙之梦：「あの日、わたしの前に現れた龍はホンモノじゃなかった！　その証拠に！」
龙之梦：「家族からも！　友達からも！　幸せから遠く引き離されて、わたしはこんな島まで連れてこられた！」
龙之梦：「レネゲイドなんて訳の分からないモノを押し付けられて……これが不幸以外のなんだっていうの⁉」
龙之梦：「……だからわたし、本当の龍を呼ぶわ」
龙之梦：「嵐が来たら、ホンモノの龍が来てくれるもの」
龙之梦：「みんなも、わたしも、きっと幸せにしてくれる」

龍之梦：「きっと、しあわせな私に変われる」
龍之梦：「そうでしょう、〝スズネ〟？」

ゆらり、と空間が揺らぐと、彼女のすぐ隣に龍が現れる。
その顔に付けられているのは、龍を模した歪な仮面だ。

龍之梦：「わたし、もっと幸せになるわ」
龍之梦：「そのためなら、何をしたってかまわない」

桐島：「……まあ。幸せってのは個々人によって違うからよ。お前の幸福がどんな形かってのはお前の好きにすりゃあいいことなんだが」
桐島：「受け入れてやれねえなあ…何したっていいだなんてよ」

佐藤：「ふふふ…くくくお笑い草だ！」
佐藤：「私が保証するよ。君は幸せだ…正確には幸せな頭だけどね」

桜庭：「そんなことをしたって…」
桜庭：「FH（アイツら）みたいに…」小さな声で
桜庭：「暴れて結局なにもかも壊してなにもない場所で呆然とするだけだよ…」

雨宮：「ま、僕は薄情な人間なのでね」
雨宮：「皆みたいに正義の為には戦ってやれないが…」
雨宮：「あえて戦う理由があるとしたら、君が偽物だからという事になるのだろうかな」
雨宮：「さっき、本物が悲しんでいたのを見たよ？」「ダメじゃないか、偽物が本物に危害を加えるなんて」
雨宮：「そんな事はあってはならないよ」
桐島：（未羽も色々ありそうなんだよな…）聞きながら
桜庭：（何か実感がこもってるような？）
桐島：（俺の周囲は訳アリが多いな…悪いわけじゃあないが）

龍之梦：「……結局、立ちふさがるのね」
龍之梦：「ほんと、占いの通りだわ、〝スズネ〟」
龍之梦：「助けてくれるんだっけ？　あの人たちが……」
龍之梦：「わたしはそんなの、信じないわ」
龍之梦：懐から真っ赤な算木を取り出すと、宙に放り投げる。
龍之梦：「さあ……みんなで幸せになりましょう？」

ＧＭ：瞬間、横殴りの豪雨と共に、強烈なレネゲイドの衝動がキミたちに襲い掛かる

▼ラストバトル

最終決戦は龙之梦（ニセ祝）・魔龙（龍）とハカＡＢ・ＰＣの計３つのエンゲージ。
ニセ祝までは10ｍ、龍・ハカエンゲージまでは５ｍとなる。

ＧＭ：セットアップからだ！
桐島：Set:アクセル+限界突破　　行動値+10：限界突破指定/雲散霧消.浸食値+6→100％
桐島：自分！
雨宮：常勝の天才！全員+28！
桜庭：バフを付与 怨念の呪石/暴走+ダメージ2D>

となり、ミドル同様攻撃力と行動値に大きなバフがかかる。
一方、今度は敵も無策ではなく……。

ＧＭ：ではエネミーのセットアップ
龙之梦：【伏龍】《空中庭園+戦力増員》セットアップ/シーン(選択)/戦闘移動/未行動のトループ2体を任意の場所に出現
龙之梦：ショウズＡＢをニセ祝のエンゲージに召喚
桜庭：まだ増えるｎ
桐島：いてて良かったぜ…雨粒の矢！
ＧＭ：そしてセットアップ戦闘移動効果で龍・ハカＡＢの三体がＰＣエンゲージに入ります
桐島：エンゲージ内が渋滞している！！

ニセ祝は新たに２体のトループを自分のいるエンゲージへ呼び出す。彼らはどちらもエフェクトの効果でカバーリングが可能であり、これで肉壁を揃えた形に。
陣形を整えた両陣営は、さっそく戦闘を開始する！
《アクセル》効果で最速を取ったのは桐島！

桐島：マイナーなし！
桐島：Main:狂戦士+タブレット+多重生成　射程視界/3人/ダイス+4個/C値-1(下限6):浸食値+11　→100％
桐島：清羅・未羽・菫に
ＧＭ：わあえげつねえ…
雨宮：ありがたい
佐藤：ありがたい…
桜庭：わーい
桐島：「これと矢面に立つくらいしかできることねえけど、頼むわ」

自分を除く味方全員にC値を下げる強力なバフを付与し、一気に攻撃態勢を整える！
この後押しを受けて動くは二番手の佐藤！

佐藤：ではまあマイナーですることないので
佐藤：【命ず】：コンセントレイト：ソラリス＋絶対の恐怖＋彫像の声＋風の渡し手（侵蝕値11）
佐藤：４体対象なのでハカの２体とショウズAと魔龙が対象かな

佐藤：(5＋2＋1＋0＋4)dx＋4＋1＋2＋0@(7＋0－1)判定/100％以上/全員、黙れ　４体対象
<BCDice：佐藤 菫>：DoubleCross：(12DX6＋7) → 10＋10＋10＋10＋10＋10＋3＋7 → 70

佐藤：わぁ
GM：なそ
魔龙：《イベイジョン》24（12＊2）
ハカA：《イベイジョン》16（8＊2）
ショウズA：《イベイジョン》8（4＊2）
GM：全員ヒット！
桐島：狂戦士のC値低下効きまくってる…

交渉による範囲攻撃は、命中ダイスが回ってなんと達成値70！
当然避けられるわけもなく……

佐藤：8d10＋10＋0＋28　ダメージ/100％以上/命ず　装甲値無視。命中した場合、シーン中対象の【行動値】－20。マイナーアクションで解除可能。
<BCDice：佐藤 菫>：DoubleCross：(8D10＋10＋0＋28) → 40＋10＋0＋28 → 78

佐藤：「君たちに語る言葉は特にないからね…これは恫喝だよ」（＊23）
魔龙：では再びの言葉の刃に、なすすべもなく沈んでゆく龍たち
魔龙：黒い液体を吐き出しながらも、しかしひときわ大きな龍だけはまだ耐えている。

78点という強烈なダメージにトループ二体は成す術もなくダウン！
魔龙のみは耐えきるものの、痛手を負ったことに違いはない！
続いて動いたのは桜庭！

桜庭：ではマイナー
桜庭：【鸞&和】：ハンドレッドガンズ＋ダブルクリエイト　侵蝕値8
桜庭：メイン
桜庭：(6＋3＋4)dx＋7@6　丹の薬莢　100％　コンセントレイト＋マルチウェポン　侵蝕値5
<BCDice：桜庭 清羅>：DoubleCross：(13DX6＋7) → 10＋5＋7 → 22

《ハンドレッドガンズ》で生成した武器による強烈な一撃をかまそうとする……が。

龍之梦：【超級幸运】《イベイジョン＋幸運の守護＋アニマルテイマー》ドッジ達成値34（（6＋6）*2＋10）

佐藤：なそ

桐島：たけえ！

桜庭：かなしい…

ニセ祝は《幸運の守護》を組み込んだコンボで強引にこれを回避！（*24）

龍之梦：では、羅盤の上のあらゆる構成物が攻撃を〝偶然〟防ぎます

龍之梦：「桐島君にも言ったけど……〝幸運〟が敵に回ると、とっても怖いのよ？」

龍之梦：「それを今から教えてあげる……」

雨宮：「おいおい、そんなんアリかい」

桜庭：「今のナシ！ノーカン！ノーカン！」

桐島：「ねじ伏せる力もあらあな」

龍之梦：「あはは！　さあ……次は誰かしら？」

嘲笑うニセ祝に刃を向けたのは雨宮！　ミドルでも猛威を振るったコンボが再びその姿を見せる……。

雨宮：ではマイナーなし、コンボ《六月の雨》で攻撃　対象はエネミー全員！

雨宮：17 dx8＋6 こうだな1

<BCDice：雨宮 未羽>：DoubleCross：（17 DX8＋6）→ 10＋10＋3＋6 → 29

命中達成値は29。ニセ祝は危ういところで回避に成功したものの、トループたちは全滅！

龍もまたHPを半分以下まで削られる！

雨宮：「……雨が降り注いだ後に幸運が？」

雨宮：「なるほど。その点に関しては、若干の共感を覚えよう」

雨宮：「〝昨日は曇り、今日は晴れ〟」

雨宮：「〝では明日は雨か？〟」

雨宮：「〝それは誰にも分からない〟」

雨宮：「〝なら、私は今雨を降らせよう。どうでもいい日、辛い一日。そんな日に雨を降らせよう〟

雨宮：「〝だって今日が雨なら、明日がどんな天気でも、納得できる〟」「〝雨ならそんなもの。曇りなら惜しい。晴れたら『昨日の雨がウソのよう！』〟」

雨宮：「〝ああどうか。私をそんな幸福な明日の為の脇役にしてほしい〟」
雨宮：「〝そんな雨を〟」降り注ぐ雨。 それは先の戦闘のように針にすらなっていないほんとうにただの雨だが、浴びるものから〝戦意〟を奪っていく！
雨宮：「……とはいえ。 竜の雨は主役の領分か」

戦闘の意志を失った龍は、やはり他と同じくどろりと黒い液になり溶けてゆく
この場に立っていられたのは、巨大な龍と……

龍之梦：「……言ってくれるじゃない。アメフラシのくせに」

嵐の中にありながら、一滴も雨を浴びていない彼女だけだった。

龍之梦：「なら……そんな言い訳にするためだけの雨じゃあない」
龍之梦：「人間のための雨じゃない、本当に幸せを運ぶ」
龍之梦：「龍のための雨をお見せするわ」
雨宮：「見てみよう。 まあ大丈夫だ、その雨はきっと明日の幸運へとつながるとも。痛みは伴うかもしれないけどね」
龍之梦：「ええ、ええ、その通り！」

龍之梦：「だから……耐えてくださいね？」

龍之梦：【凶兆の虹】《アニマルテイマー+縛鎖の空間+要の陣形》メジャー/RC/対決/3/体/C 10/0/視界内の3体に+付与

ここで手番が回ってきたニセ祝は、佐藤を除く三人にオートアクションを封じる[状態異常:重圧]を付与！(*25)

桐島：ＰＣ性能が殺されてしまう！
雨宮：タブレットが使えなくなるからちくしょう！
桐島：Auto 封じられるとなにもできねえぞ！
佐藤：かなしみ
桐島：なのでタイタス昇華する必要があったんですね
桜庭：桐島くんだけを殺す攻撃かよ！(*26)
ＧＭ：これがストーカーの執念か…

雨宮：「……ふむ。三枚目では脇役には影響が薄いようだね。 だからといって身体がキツくないわけではないが…！」
桜庭：「なんか体だるすぎてふわふわしてきた…これが、幸せ…？」
雨宮：「その方向の幸福はソラリスの領分ではないかな？」

龍之梦：「あっはは！　どう？　これでわかってきたんじゃないかしら？」
桐島：「分かるって…何が？」
龍之梦：「幸せになるってこと……無駄に動き回っても、不運が待ち構えているだけよ」
龍之梦：「おとなしくして……受け入れればいいの、幸運をね！」
桐島：「押し売りはお引き取り願います」
龍之梦：「そう？　じゃあタダであげる！」
龍之梦：「さあ……場は整えてあげたわよ、〝スズネ〟」
龍之梦：「龍のつもりなら、やることはわかってるでしょ」

魔龙：「……」
ＧＭ：身をよじった龍は、何度か聞いたあの不思議な音で鳴くと
ＧＭ：動き出す。
最遅行動となった龍はＰＣエンゲージで攻撃を開始する！

魔龙：【龍尾】《吹き飛ばし+天を統べるもの+要の陣形+未知なる陣形》メジャー/白兵/対決/５体/至近/Ｃ 10 / 12 /命中した対象の飛行解除+対象に 1 点以上ダメージを与えた時 8 m 移動

《未知なる陣形》でＰＣ全員を対象に取る物理攻撃！　さらにここへ……

龍之梦：「そこ、動かない方がいいよ、みんな？」
魔龙：(7+5)dx+ 12　【龍尾】
<BCDice：魔龙>：DoubleCross：(12 DX 10 + 12) → 10 + 10 + 4 + 12 → 36
龍之梦：《現実改変》オート/単体/視界/判定直後に使用/対象の達成値+ 20 /使用後自身の HP- 20 点

《現実改変》によって達成値を+ 20 ！　計 56 の命中がＰＣに襲い掛かる！
流石にこれを躱せる者はおらず、全員が直撃を喰らうが……

魔龙：6d 10 + 12　ダメージ【龍尾】
<BCDice：魔龙>：DoubleCross：(6D 10 + 12) → 34 + 12 → 46
魔龙：全員 46 点装甲有効ダメージ！

桐島：Auto:雲散霧消　至近:範囲(選択):HP ダメージ- 25 :浸食値+ 4　→ 100 %
桐島：俺・清羅・未羽・菫！

ここで桐島が[重圧]をタイタス昇華で打消し、強力なダメージ減少エフェクト《雲散霧消》を発動させる！
25 点の減少に加えて、今まで買い集め、味方に配ってきた防具の効果も乗ってその威力は大幅

に減衰……さらに！

桐島：未羽が11点、清羅が13点、菫が20点と
桐島：Auto:ディヴィジョン+タブレット+多重生成　射程視界/3人/HP ダメージ半分受け持ち:浸食値+(1d10+6)
桐島：で未羽が5点　清羅が6点　菫は10点ダメージ　俺は21点と自分で受ける13点で
桐島：俺は死ぬ　ので龍之梦のロイスをタイタス昇華して復活
桐島：HP 11で復活ー

《ディヴィジョン》で仲間に通るはずのダメージすべてを半減、ほぼ一桁代に抑え込む！
自身は倒れるものの、これもタイタス昇華で復活！

桐島：「あー…いってえなあ」倒れたその瞬間にまた立ち上がる
雨宮：「この実際の予測ダメージと痛みの量とのズレ… またかい啓一。まあ、計算した無茶なのだろうが…」
桜庭：「桐島くん!? あんまり無茶しないでね！」
佐藤：「親切痛み入るね」
桐島：「おー、俺も痛いの嫌いだしなー分かってる分かってる。それより痛くなかったか？」
桜庭：「うん…もろに受けても大丈夫なくらいだったよ。」
桜庭：「…だから無理しなくていいんだってば…」
桐島：「なら良かった」にっこり

龍之梦：「……ふぅん、そうやって背負い込むんだ」
龍之梦：「ますます……放っておけないのね」

忌々し気に笑うニセ祝だが、盤面を見ればトループは全滅、龍はHP半減、
自身は被弾こそしていないものの、身を削るサポートで大きく消耗しているという有様。
ここで龍が行動を終え、全員が行動済みとなり第2ラウンドへ。

セットアップは桐島の《アクセル》とニセ祝の《戦力増員》のみに留まる。
地面に流れたはずの黒い泥が、再び形を整えて蘇り、再びカバーリングトループが肉壁となる。
一番手はやはり桐島。再び三人にC値低下のバフを配ると、それを受けた佐藤が……

佐藤：じゃあまあそこの竜殴るしかないな！
佐藤：【畏れよ】：コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖（侵蝕値4）
佐藤：(5+2+3+0+4)dx+4+1+2+0@(7+0-1)判定/100%以上/畏れよ
<BCDice:佐藤 菫>:DoubleCross:(14DX6+7) → 10+10+10+10+10+5+7 → 62

再度、恐怖の交渉攻撃が飛んでくる！
エネミーはこれをトループのカバーリングで防ぐも、肝心のトループは一撃でダウン！
早くも肉の盾がごりっと削られてしまう。

ＧＭ：では次！　桜庭さんどうぞ！
桜庭：とりあえずマイナーで重圧回復
桜庭：メジャー
桜庭：対象竜で攻撃
桜庭：(6+3+4)dx+7@6　丹の薬莢　100％　コンセントレイト+マルチウェポン　侵蝕値5
<BCDice：桜庭　清羅>：DoubleCross：(13 DX 6+7) → 10 + 10 + 5+7 → 32
魔龙：《イベイジョン》24（12 * 2）
魔龙：ヒット！
桜庭：7d 10 + 30　サイドリール+1D　呪石+2D
<BCDice：桜庭　清羅>：DoubleCross：(7D 10 + 30) → 24 + 30 → 54
魔龙：C(103 - (54 - 12)) 残HP
<BCDice：魔龙>：DoubleCross：計算結果 → 61

桜庭：「腐れ」
桜庭：水銀の弾が竜に食い込む
魔龙：「――――ッ！！」
ＧＭ：長い咆哮。だがまだ斃れない

54点のダメージで体力が1／4を切る！
さらに続く雨宮の【六月の雨】は……

雨宮：16 dx8+6　六月の雨
<BCDice：雨宮　未羽>：DoubleCross：(16 DX 8+6) → 10 + 10 + 10 + 5+6 → 41
雨宮：ヨシ
桐島：しゅごい
ＧＭ：うげえ全員ヒット！
雨宮：5d 10 + 22　装甲ガード有効
<BCDice：雨宮　未羽>：DoubleCross：(5D 10 + 22) → 26 + 22 → 48

龙之梦：「くっ……あああっ!!」
雨宮：「雨を浴びたら幸運…もいいけれど」
雨宮：「基本、雨を浴びたら家に帰るものだよ。　明日またいい事があるさ、幸福とは相対的なものだからね。　故に帰り給え」
龙之梦：「うう……ま……まだ……」
龙之梦：「まだ、わたしは……龍を……見てない……！」
龙之梦：座り込んではいるものの、もはや戦闘は不可能だろう

龙之梦：ダウン！
桐島：やったー！重圧から解放されたー！

高回避を誇るニセ祝にも命中させ、一撃で叩き落す活躍！　これで残る敵は龍1体に。
残された龍は再度の物理攻撃を試み……。

魔龙：では、ニセの祝が倒れたとたん、龍がのたうち始める
魔龙：暴れる龍の尾が全員に襲い掛かる！
魔龙：【龍尾】《吹き飛ばし+天を統べるもの+要の陣形+未知なる陣形》メジャー/白兵/対決/5体/至近/C 10 / 12 /命中した対象の飛行解除+対象に1点以上ダメージを与えた時∞m 移動
魔龙：(7+5)dx+ 12　【龍尾】
＜BCDice：魔龙＞：DoubleCross：(12 DX 10 + 12) → 10 + 10 + 7+ 12 → 39

ニセ祝による支援こそないものの、やはりそれなりに高い命中達成値でＰＣ全員を巻き込む！
ダメージダイスも回って32 点のダメージは、しかし再び桐島の《雲散霧消》とＵＧＮボディアーマーで大きく減少。結果、誰一人ロイスを失うこともなく耐えきる！

決戦はとうとう第3ラウンドへ。既にセットアップは両陣営とも使い切り、素の行動値で最初の手番を勝ち取ったのは……。

佐藤：ではではマイナーは特にないので
佐藤：【畏れよ】：コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖（侵蝕値4）
佐藤：そのまま残ったキミに
魔龙：こい！
佐藤：(5+2+3+0)dx+4+1+2+0@(7+0) 判定/100 %以上/畏れよ
＜BCDice：佐藤 菫＞：DoubleCross：(10 DX7+7) → 10 + 10 + 10 + 10 + 1+ 7 → 48
佐藤：5d 10 + 10 + 0 ダメージ/100 %以上/畏れよ 装甲値無視。
＜BCDice：佐藤 菫＞：DoubleCross：(5D 10 + 10 + 0) → 30 + 10 + 0 → 40

佐藤：「とりあえず一言だけあげるとしようか…」
佐藤：「おやすみ、姫」

魔龙：その言葉が〝彼女〟に届くと同時に、
魔龙：今まで降り続いていた雨が、止んだ。
魔龙：再び、長い長い咆哮をひとつ

魔龙：……そして、龍は倒れた。

龙之梦：「そ……んな……」
龙之梦：「負けたの……どうして……」

桐島：「そりゃあお前決まってるだろ」
桐島：「お前が誰に何したっていいって思ったから、反発されただけさ」
桐島：「つまりは友情パワーの前にぼっちは無力」
龍之梦：「な……何を言って、いるの……理解できない……」
桐島：「これがつい最近生まれた人格…情緒が全く育ってねえ…」
桐島：「納得できねえなら学校来いや、相手してやるからよ。友情の素晴らしさを噛み締めな」
桐島：「あ、鈴音は元に戻しとけよ」
佐藤：「多勢に無勢というのは本当に恐ろしいものだね」
雨宮：「いや数の面では上を取られていた気もするが」
佐藤：「いやあ道具扱いは数にも入らないものなのだよ」
桜庭：「ケホッケホッ…雨で風邪ひいたかも…」
雨宮：「おっと大丈夫かい？」
桜庭：「数はすぐ減ったし…ちょっとだるいかも明日朝いなかったら欠席ってことで。」
佐藤：「おっと、体調を崩してもらっては困るな…さっき奢って貰えるといったね？ 温かいものでも飲もうじゃないか」
桜庭：「もし風邪で移すと悪いし今度で…」
佐藤：「それは残念。ではお大事に」
桜庭：「ありがと」

龍之梦：「……いや、イヤ、嫌よ！ 何も聞こえない！ わたしは……！」
龍之梦：「わたしが、ほんものなのに！」
桐島：「別々でいいだろ」
雨宮：「…」
桐島：「好意の押し売りしてくる鈴音とは全然ちげえんだろお前。じゃ別々でいいじゃん」
桐島：「鈴音じゃない別の誰かなら俺の友達の枠はぜんっぜん開いてるからよーそれで満足しようぜ」

龍之梦：「桐島くん……なにか言ってよ！ どうして何も言ってくれないの!?」
龍之梦：……明らかに様子がおかしい

佐藤：「ふむ…どうやら聞こえていないようだね？」
佐藤：「…」偽の子の五感をチェックしよう
龍之梦：では、チェックのために近寄ろうとすると

彼女は座り込んだまま、顔をかきむしり始める……と、往復する爪の間から、黒い泥がこぼれ始め、それからすぐに、どろり、と〝顔が剥がれた〟
彼女の顔には……何もない。ただ、黒い穴が存在していた。

桐島：「〝虚実崩壊〟…いや〝妄念の姿〟か……」
佐藤：「最初に龍の顔を見た時と同じ状態だね…とはいえこれが元に戻ったということなのかも私にはわからないが」
佐藤：「FHとの接触があった以上既にこの時点で異常だったのかもしれないからね」
桐島：「そうだなあ…そうだよなあ…」
桜庭：「アンタもうジャームなのか？」

「あーあ……この子もトモダチじゃあなかった」

……いつの間にか、羅盤の後方に〝従者〟が立っている。

「面白いやり方だと思ったんだけどね……ヒトの〝欲望〟に、カオを与えたらって」
「やっぱり、トモダチは人間が一番！　桐島さんもそう思うよね？」
……彼女は既に、全身が黒い泥の塊と化している。

桐島：「……お前」
桐島：「もう一つ、忠告が出来たな」

桐島：「友達を選り好みしようとする贅沢者に友達は出来ねえよ、何故ならお前も値踏みされるからだ」

GM：「へーぇ……それなら」
GM：「そんな〝トモダチ〟はいらない。ぼくは自分で選んだトモダチと遊んでいたいだけなんだから」
GM：「桐島さんと、ぼくのトモダチ、きっと違うんだね、いろいろ」
GM：「……じゃあ、桐島さんとはトモダチになれるのかな？」
GM：低い声で笑ってみせる。
桐島：「お前に改めるつもりがあるならな」
佐藤：「まあそう簡単には無理だろうね、ディオゲネスクラブってのはろくでもない集まりだから」
桐島：「そうみたいだなあ」
桜庭：「衝動と欲望に誰かを沈めるのが遊びか…だから気に入らないんだ…」

GM：「ふーん……あ、そろそろ君たちのトモダチが起きるみたいだよ」
GM：「ぼくのトモダチじゃないし、行ってあげれば？」

「あーあ……何処にいるのかなあ、ぼくだけのトモダチ……」
そういうと、ゆらゆらと体を揺らして、従者は羅盤から降りた。
……だが、着地の音が聞こえない。
羅盤のそばには、もはや誰もいない。

祝：「う……」
雨宮：「…おや、眠り姫のお目覚めだ」

一方で、龍の体から鱗が剥がれ落ちてゆき、最後に残った頭部から
龍を模した仮面が、ことりと剥がれ落ちる。
そこに横たわっているのは、〝本物の〟祝……どうやら命に別状はないようだ。

桐島：「一先ず一件落着か」
桐島：「疲れた……帰って寝よ……」
佐藤：「悪夢は覚めたかどうか、聞いてみようじゃないか」
桜庭：仮面に構造看破で例えば仮面がＥＸレネゲイドかとか分かりませんか？
ＧＭ：では龍を模した仮面に構造看破すると、
ＧＭ：それが「怠惰の仮面」と呼ばれるＥＸレネゲイドであると判明しますね
佐藤：「まあ、案の定いつものやつだね」仮面は回収しておこう
桜庭：「よかった…アイツを撃たなくていいんだね…」そう呟いて手元の銃を分解し臨戦態勢を解く
雨宮：「まったく仮面というのは厄介なものだね、なぁ？」
佐藤：「ああ、そうだね。とても厄介なものさ」（*27）

桐島：「おい、鈴音、こんなとこで寝てると風邪引くぞ」
祝：「ふぇ……？」

目を覚ました祝は、伊達メガネを外し、何度か目をこする。
……そして、ぼんやりとした顔のまま海の方を指さした。

祝：「あ……龍……」

……ふと、全員の耳に、あの不思議な音が聞こえてくる。
振り返ったものは、嵐が消え、晴れ渡りつつある空の
掻き消えてゆく黒雲の、その端に

……長い、長い、尾を見つけるだろう。

桐島：「おー、龍だな」
雨宮：「…そうだねぇ」
佐藤：「良いものならいいんだけれどね」
桜庭：「アンタのやり方嫌いだけど占いは信じるから…アンタも信じなよ」
祝：「うへへ……そうですか……？」

祝：「じゃあ……やっぱり龍は……いたんです、ね……」
雨宮：「うん、居たとも。これはもしかしたら願いが叶うかもしれないね」
桐島：「流れ星みたいなもんか…」
祝：「じゃあ……ひとつだけ……」
祝：「どうか、この島にいる人だけでも……みんなが納得するような形で」
祝：「しあわせになりますように……なむなむ」

軽く目を閉じ、お祈りの姿勢を取った……かと思うと、そのままころりと転がってしまった。
規則正しい寝息が聞こえてくる……爆睡したようだ。

佐藤：「眠り姫様は随分と寝相が悪いようで？」
桐島：「気持ちよさそうな寝顔してんな…」
雨宮：「やれやれ…目が覚めたら風紀委員による地獄の責め苦が待っているというのにね？」
桐島：「じゃあこれがこいつの最後の安眠ってことで」
佐藤：「いやまあ、風紀委員だって全員が全員非道ってわけじゃないさ…会いたくないのは居るけどね」
桜庭：「いや、まあ仮面なら事情次第で無罪かな？」
雨宮：「完全無罪は厳しいと思うけどね？」

桜庭：「おっと、誰か運ばないといけないね。私は今体調悪いからパスね」
桐島：俵担ぐ時みたいにして担ぐ
桐島：「かっる…」
雨宮：「あ、そうだ啓一」
桐島：「んー？」
雨宮：「さきほどの戦闘でニセ祝が言っていた事なんだがね」
桐島：「何か言ってたっけ？」
雨宮：「うん」
雨宮：「好きな人がどうとか」
雨宮：「どう思う？」
桐島：「ああ……」
桐島：「俺、そういう人作らないから」
佐藤：「あらまあかわいそ」
桜庭：満足そうな顔でしきりに頷いている
雨宮：「えぇーほんとでござるかぁー？」
桐島：「うん、可哀想だからな。早死する奴と一緒になるのは」
桜庭：「ん？」
雨宮：「なるほど」

桐島：「じゃ、帰ろうぜー。腹減った」
雨宮：「啓一、ちょっと後ろ向いて」

桐島：「んー？」向く
雨宮：背中にバチィ！　という感覚が走る　そちらを見やればライターの着火器だけを取り外したものが首筋に充てられて火花が走っている！
桜庭：「何してんの⁉」（*28）
桐島：「ガッ。俺今鈴音も担いでるんだけど…！」
雨宮：「罰を受けたくなければ自分を大事にしたまえよー」と言いながら走り去っていく…
桐島：「理不尽じゃねえ…？どう思うよ清羅、菫」
佐藤：「うんまあ…理不尽かどうかで言うと…7割くらいは理不尽かな」
桜庭：「なるほどー。じゃあ桐島くん、私はあなたが死ぬより早く障害を排除するから、これから無理できるなんておもわないでね！」
桐島：「俺も死にたくないしなあ。ありがとな」
桜庭：「では体だるいんでお暇ー」ゆったりとした足取りで寮へ向かう
佐藤：「まあ、私から見ても君たちは面白いからね…せめて卒業までは健やかに生きてくれたまえ」
桐島：「FHが暴れなきゃ全然余裕なんだけどな」
桐島：「……じゃあな。鈴音じゃない誰かさん」
……その呟きに、答える声はなく。その代わりに。
七種：「おーーい！！　無事かーー！？」
道の向こう、倒木や落石を避けながら、見覚えのあるフォルムが結構な速度でやってくる。
七種：「応援を連れてきたんだが……どうやら一足遅かったようだの」
クリス：「うぷ……ちょっと、まって……」
桐島：「おーちょうどいい所に。はいこれ」と言って七楽に鈴音を渡す
七種：「ん。これは……祝氏か」
七種：「……ま、事情は学校で聞くとしよう」
七種：「乗るか？」とアルキュオネウスを指そう。
桐島：「歩いて帰るから、今日はいいわ」
七種：「わかった。この道もまだ瓦礫やら何やらが多い。気を付けていけ」
七種：「よし……戻ろう、ブラッフォード氏！」
クリス：「……イヤぁ！　もうちょっと休憩してからじゃないと絶対いや！」
桐島：「かわいそ…」
かくして、嵐は過ぎ去った。

雨風は禍福を呼び、今ここに残ったのものは――――

（*23）
桐島：恫喝されて死んでやがる…
桜庭：メンタル弱者の竜たち
佐藤：かわいそ…
ＧＭ：ロボに殴られるよりもえぐいダメージをだす恫喝って…
佐藤：バトルものによくある死の幻視で本当に死んじゃったみたいな感じだろうか…
ＧＭ：コワ～…

（*24）
ＧＭ：クソ回避なニセ祝ですが放っておくと自滅します
ＧＭ：回避が高い代わりにどんどん自分のＨＰを削って強化したり殴ったりするタイプ
ＧＭ：放っておいても死ぬけど生きてる間は支援しまくるぜー！
佐藤：めんどくさいやつ！
桐島：うっぜ！
佐藤：まあつまり面倒になる前にバフ先消してしまおう
桜庭：そうだね
なお、一度も被弾しなかった場合、ニセ祝は第3ラウンドの手番で体力が尽きる予定になっていた。《現実改変》の代償は洒落にならない。

（*25）
実際にはバッドステータスの付与だけではなく、《装甲貫通》も組み込んで20点近いダメージをブチ当てる……つもりだったのだが、ＧＭの勘違いにより攻撃エフェクトを積み忘れるという失態を犯したため、このような結果となった。悲しい。

（*26）
桐島：１攻撃1ロイスの法則をこういう形で保って来るとはね…
佐藤：このパーティ見事に重圧が1人にしか刺さらないな…
桐島：七楽にも刺さらんからな…

（*27）
雨宮：仮面を使って自ＰＣが暴れる展開がやれるからアカデミアのリレキャン難易度は低いかもしれない！（やらない）
桐島：そうだね×１（やらない）
佐藤：そうだね×２（やらない）
桜庭：そうだね×３（やるかも）
佐藤：元ディオゲネスクラブのＦＨが再び仮面付けて暴れ始めましたとかやらかしたら処分され

るやつだから特にやれねぇー！
ＧＭ：危ないすぎる…
桐島：こいつがジャームになった所で自傷するだけなんだよな…何も始まらねえ…
ＧＭ：それはそれで悲しい…
佐藤：自傷ジャームの悲しき末路…
雨宮：カイドウみたいに「俺を殺せるものはおるか！」で暴れだすかもしれない
ＧＭ：コワ～…

（*28）
雨宮：なんとなくこらしめないといけないなと思って一番最初に浮かんだやり方だったので…
雨宮：今後こういった発言をするたび啓一くんの首筋は焼け焦げていく
桜庭：コワ～…
佐藤：コワ～…
ＧＭ：戦いで死ぬのが先か、首筋で死ぬのが先か…

◆エンディングフェイズ

▽シーン12：龍夢

結局、仮面の影響で暴走していた祝は、島内の病院に一時入院ということになった。
事件から数日。風紀委員会による事情聴取なども済み、交通機関も無事復旧。
台風一過の夏の午後、昼休みのチャイムがどろりとした暑気を緩く揺らす、夏の日常が再び帰ってきつつあった。

祝：「さあさあ御用とお急ぎでない子羊はごゆっくりと迷いをお聞かせくださいませ！」

――そうして帰ってきた日常には、彼女の姿も当然あるわけで。
昼休みの教室、人だかりを見つけた一行の前で、オカルト研究部副部長、祝は再び占いでクラスメイト達を沸かせていた。

桐島：野菜ジュース飲みながら興味なさそうに人だかりを見ていよう　ズゴゴゴゴ
七種：「逞しいというかなんというか……」
佐藤：「いやはや、あんなことがあってもやっぱり変わらないものだね」
桜庭：「あいつ何してんだ？私ちょっと見てくる」人だかりに混ざっていってなにやってるか探ります
桐島：「忘れてんのかね、それとも筋金入りなだけか」

GM：では桜庭さんが近づくと
祝：「あ！　佐藤さんに桜庭さん、雨宮さんに七楽まで！」
祝：「……あと、桐島、さん」
祝：流石に思うところがあるのか、やや顔を曇らせる。

桐島：「何」
雨宮：「いやー元気そうでよかったねー」
佐藤：「やーやー」
桜庭：「あー、アレならまだリカバリ効くって落ち込まないで。前の押しの強さどこやったの？」
桐島：「詫びならこいつらにやっとけよ」
祝：「う……」

祝：「……あの！　この度は本当に！」といきなり机をつかんで立ちあがり
祝：「ありがとうございましたっ!!」
GM：と、頭を下げる。

祝：「皆さんがいなかったら、小生どうなっていたことか……」
祝：「そのっ……本当に！　ああ、こういう時に限って言葉が出ない！」
祝：「と、とにかく！　ごめんなさい！　そしてありがとうございます！」

桜庭：「まあ、大変だったね。気にしないでとは言えないけど、二度とやんないならいいよ。」
祝：「や、やりませんよ！　絶対！　死ぬかと思いましたし！」
佐藤：「まあちょっとした下心につけこんで色々やらかすのがあいつらの手口だからさ」
佐藤：「まったく気に病むなとは言わないけれど気にしすぎる必要もないさ」
桜庭：「ほんとに？ほんとに絶対？恋心とかにまた付け込まれない？」
祝：「ええ、もう絶対！　と言い切れるのは！」
祝：「自分の恋愛に対しては、これから真正面にぶつかってゆくことにしたからでございます！」
祝：「……あと、しばらくは風紀委員会の監査もついてますから」と横目をちらり。

視線の先を見ると、実にイヤそうな顔をしたクリスが、腕組みして壁にもたれかかっている。

桜庭：前科一犯による監視
桐島：←特に監視されてないエフェクト無断使用常習犯
佐藤：「お勤めご苦労様」
雨宮：「割れ鍋に綴じ蓋？」
桜庭：「ブラッフォードさんなら相談相手にもなりそうだしよさそうだね。信じるよ。」
クリス：「勝手に相談相手に指定しないで欲しいのだけど……！」
桐島：「風紀委員は大変だなあ」トマトジュースの封を開けながら
桜庭：「いいじゃん。〝もしも〟祝さんが暴走したら責任取らされるの多分あなただよ？」
桜庭：「ケアしといた方が身の為だと思う。」
雨宮：「オーヴァードは絆で強くなる生物だからね」
桐島：「後ろ向きな絆だなあ…」
クリス：「はぁー……気は重いけどこれも仕事よね」
佐藤：「ま、がんばるといいよ」
桜庭：「面白いひと桜庭だと思うから付き合ってあげて楽しいと思うよ。問題起こさなきゃね。」
桐島：「ヤクルトいる？」ブラッフォードに
クリス：「……ありがと」
クリス：「ふぅん、こういう風に女子のポイントを稼ぐわけね」にやにやと笑う。
桜庭：さりげない気配りでフラグを建てる男
桐島：「あ、こういうのがポイントになるのか……そうか……知らなかったな……」
クリス：「素で言ってそうだからタチ悪いわぁ……」
桜庭：「ねー」
桐島：「清羅まで賛同するのか……いや結構一緒にいる時間多いもんなもう……」
雨宮：「ははは。さすがは主役だね」
桜庭：「私の好感度も知らない内にカンストだったり？」けらけらと笑う

祝：「ぐぅっ……さりげなく二人の時間を見せつける高度な匂わせ……！」
祝：「いや、負けはしない！　正面から立ち向かうと決めたのですから！」

佐藤：「人生ハードモードそうだね」
桜庭：「安心しな私はライバルじゃないから。」
雨宮：「私は違うからっていう子が一番危ないとかなんとか」
桐島：「知らない所ですけこましになってる気がする」
七種：「知らないところだったのか……？」
桐島：「何？お前までそういう感じに俺を扱うワケ？」
七種：「いやあ、余は単に苦労が多そうだなあと思っただけであるとも」

祝：「ともかく……今回の事件で小生もフダ付きでございます」
祝：「しかーし！　見張りが付くということを逆手にとれば！」
祝：「風紀委員会がそばにいる間にまさかアヤシイ占いをしたりはしないだろう！　という心理的保障が付く！」
祝：「つまり！　今このタイミングこそボーナスタイム！　オカルト研究部の汚名返上チャンスなのでございます！」
クリス：「……っていう屁理屈で、わたしが付いてる間ずーっと占いをしてるわけ」
クリス：よくやるわホント……と深くため息を吐く。
桐島：「苦労してんね」
桜庭：「汚名ポイントそこかな…？」
佐藤：「まあ害がないなら好きにさせておけばいいんじゃないかい」
雨宮：「まあ仮にもオーヴァードのやる占いなんだから」
雨宮：「まったくの眉唾ではないし、そこまでしょげる事でもないのではないんじゃないかい？」
とクリスに
雨宮：「もしかしたら君の気になる殿方にも良いところを見せられるやもしれないよ？」
クリス：「なッ、何を！　言っているのかしら雨宮さん!?」
桐島：「へー、成就したらいいな」
桜庭：「疲れたら愚痴くらいは聞くよブラッフォードさん。」
雨宮：「流石にこの場合のそれは啓一ではないよ？」
桐島：「分かってるって」
クリス：「わかってるわよ！」
クリス：「わたしの趣味はもっとこう……白馬に乗ってる感じのオーヴァードで……」
桐島：「だっさ…」
桜庭：「そのオーヴァードへの執着は何なの…？」
佐藤：「ふーむ…それが似合うのはどういうタイプだろうかね…非常に難しいと言える」
雨宮：「チャリオットパラー持ちがどこかで聞いてるやもしれないんだからあまり迂闊な事は言うものではないよ啓一」
桐島：「七楽の奴を白くペイントしようぜ」
クリス：「いやよこんな運転の荒いチビ！」

桐島：「ひっでー」
桜庭：「その口の悪さ直せよぉ、そんなんじゃ白馬のオーヴァードに愛想つかされるよ。」
七種：「むぅ……やはり鉄輪形態にはクッションでも乗せるべきか……？」
桜庭：「乗り心地は悪かったね。」
桐島：「俺はあの武骨な感じ好きだけどな」
七種：「そ、そうか!?　では今度新形態の試運転にご招待しようではないか！」
桐島：「乗ってやるけどどんな形態か先に言え」
佐藤：「まあ有為かどうか試す分にはやぶさかではないけど？」
桜庭：「死なないレベルならなんでも付き合うよ！」
七種：「うむ、ありがたい話だ……ちなみに新形態は球形を想定していてな」
七種：「坂道を転がることで従来のそれに比べ高い推進力と燃費を実現しており……」
桐島：「俺ら中でもみくちゃにならねえ？」

祝：「……えーと、今占ったんですが」
祝：「乗ると死にますよ、皆さん」
佐藤：「まあ占わなくてもだろうねぇ」
桐島：「だってよ。ま、それでも実験はするんだろ？付き合ってやるよ」
桜庭：「人形くらいなら多分つくれるからそれで試そう」
七種：「ふむ、人形によるテストか……確かに」メモメモ

祝：「……そ、それでは！　七楽の試運転で皆さんが死なないよう！」
祝：「僭越ながら小生も尽力いたしましょう……おまじないで！」

と、懐から、何やら複雑な模様の刻まれた木の板を取り出す。

祝：「ではいきますよ！　これが表なら万事ＯＫ！」
七種：「裏なら？」
祝：「裏だったら……その時のお祓いはサービスしましょう！」

そう笑顔で言ってのけると、祝は木の板をぴんと弾く
午後の陽光の中、くるくると回転した木の板は――――

▽シーン13：仮面

学園都市、何処とは知れぬ昏い部屋に、人影がいくつか。
制服や戦闘服、舞台衣装のような者まで……その外貌はさまざまだが、たったひとつだけ、彼らには共通点があった。

「それじゃあ、この大騒ぎも無駄にはならなかったってワケ？」
「うん、候補はいくつかね」

日輪と月輪の意匠が施された仮面が頷くと、部屋中央に積み重ねられたモニターが表示を変える。
島の全域を表す地図に、大小様々な光点が現れ、ぼんやりと明滅を繰り返す。

「――これがあの雨で洗い出された〝遺跡〟の候補地、ということか」
「思ったより多くない？　これ全部調べるの？」
「暴走させたとはいえ、所詮Bランクじゃこの程度……」

同じく仮面を付けた何人かが口々に反応を返す。
それらを制すように、小柄な仮面の少年が軽く手を挙げると、

「まだ確定したわけじゃない。この点々全部が遺跡なのかもしれないし」
「あるいは、この点々は全部入り口でしかなくて、どの場所を通っても最後は同じ遺跡に着くようになってる……」
「なんてこともあるかもね」
「ひょっとすると全部ただの勘違いで、遺跡なんて最初からなかったってのも……」

くすくす、と一人で上げた笑い声は、ぞっとするほど渇いていた。

「まあ、でもいいんだ。夏はまだ長いんだから、ゆっくり調べていこうよ」

「これは僕たちの――僕たちだけのオモチャなんだから」